
零崎文織の人間日記

星神 明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎文織の人間日記

【Nコード】

N5255R

【作者名】

星神 明

【あらすじ】

「零崎一賊」――それは「殺し名」序列三位に君臨する名。

その零崎一賊の一人、零崎文織は”文学少女”だった。

はみ出し者の「死神」石凧吹風や、兄である「殺人鬼」零崎烈識と共に、今日も文織は零崎を行う……………！

プロローグ ゼロの焦点（零の昇天）（前書き）

初投稿です。

こんな駄文で申し訳ないですが、頑張って書き続けたいです。
感想や意見を頂けると、とても嬉しいです。

……ちなみに、遠子先輩は出てこないのです。

プロローグ ゼロの焦点（零の昇天）

そこは、どこにでもある普通の図書館だった。

その普通の図書館の中に設置されている普通のベンチに、一見“普通”の少女が座っていた。

黒いセーラー服に、三つ編み。

おまけに黒縁の丸眼鏡と、その少女は一見“普通”の「文学少女」だった。

熱心そうに読んでいる文庫本の表紙には、蒼い髪の少女が写っていた。

さて、「密室で起きた猟奇的な殺人事件を解決するために主人公が謎解きを始める」というページに差し掛かった時だった。

不意に、ページの上に影が差した。

少女の前に、茶色のトレンチコートを着込んだ男が立ったのだ。

しかし少女は気にした風もなく、黙々と本を読み続けた。

暗いところで本を読むと目が悪くなると言われているが、もはや気にするほどの視力でもなかったのだろう。

少女が気づかないことを気にもせず、コートの男は懷に手を入れた。

そして、

前触れも無しに少女にサバイバルナイフを投げつけた。

投げられたナイフは常人では見切れないスピードで飛び、少女の額に突き刺さる、はずだった。

しかし少女の額からは何も生えておらず、その代わり図書館の天井にナイフが突き刺さっていた。

少女は、相変わらず蒼い髪の少女が写っている本を読んでいる。自信が命の危険に晒されたことすら、気づいていないようだ。

男の顔が引きつり、服の中に仕込んであった大量のナイフが宙を舞った。

だが一本も少女に刺さることは無く、その全てが天井に突き刺さった。

男の顔が今度は恐怖に歪み、少女に背を向けて逃走を図った瞬間。パタン、と、本が閉じられる音がした。

それは終焉の合図であり、開幕のサインであった。

男が恐る恐る振り返ると、先ほどまで本に熱中し、没入していた少女が、文庫本を近くにあった手提げに入れながら立ち上がるところだった。

男が少女の方に振り向いた時、

「さっきからなんなのあなたは！集中して本が読めないじゃない！」

「図書館では静かにしましょう」と標語が書いてあるポスターの前で、大声で怒鳴りつけた。

その余りの剣幕に完全にビビった男は、思わず尻餅をついてしまう。（殺される……！！）と自分の死を確信した男だったが、よく見ると

少女の目は自分を見ていない。

本棚の陰を、じっと睨んでいる。

チャンスは今しかない、慌てて逃走を図る男だったが、運命は彼を許さなかった。

「何、あれ……………」

少女は天井から生えている無数のナイフに気が付き、呟いた。

そして、逃げようとしたまま固まっている男とナイフを交互に見比べ、

「つまり、私、殺されかけた…？」

その顔に浮かぶのは恐怖ではなく、小さな微笑み。

少女の言葉と共に放たれた殺気に、男は指一つ動かせない。

そんな男を見ながら、微笑みを浮かべたまま、少女は傍にある手提げに手を伸ばした。

そこから何かを取り出しながら、少女は男に尋ねた。

「ねえ、一つだけ教えて？あなたの名前は、なんて言うの？」

「お、大鵜、駒鳥……」

すでに生きることを諦め、少女の為すがままになってしまった男は震えながら、自身の名前を告げた。

少女は嬉しそうに笑うと、

「そう。オオツグミ コマドリっていうの。いい名前ね。」

そう言うと、少女は手提げから手を出した。

その手に握られて、いや“掴まれて”いるのは、巨大な鉄の塊。

“それ”を振り上げ、少女はにこやかに告げる。

「あなたのことは、きっと忘れないわ。刻んで、記して、留めてあげる。」

“それ”を振り下ろしながら、言葉を紡ぐ。

「——それでは零崎を、行いましょう。」

ゼロザキ
フミオリ
零崎文織。

見た目も中身も文学少女な、殺人鬼の物語が、始まる。

プロローグ ゼロの焦点（零の昇天）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

こんな駄文ですが、少しでも面白いと感じていただけたら幸いです。
次回がいつになるかは分かりませんが、がんばって書きます！
それでは。

第壹章 異邦人（違法刃）（前書き）

はみ出し者の死神が登場します。

残酷な描写って入れたけど、原作に比べれば普通なんじゃないかって思えてきました。

第㉔章 異邦人（違法刃）

《普通の世界》

そう呼ばれる世界の、裏の裏の裏。

《暴力の世界》と呼ばれる世界は、【殺し名7名】 【呪い名6名】
が犇めく、異形・異端・異能こそが支配する世界。

その中で最も忌避される存在。

それが、「零崎一賊」。

血縁ではなく流血でのみ繋がり、理由無く人を殺す殺人鬼集団。

その中の一人が、図書館に設置されているベンチに座り込んでいた。
きれいな黒髪を三つ編みにし、眼鏡の奥の目は優しそうで、一言で
いうと、文学少女だった。

着ているセーラー服もよく見る黒色だが、所々に赤い点々が飛び散
っている。

ちなみにその赤い点々は、少女の頬にも少しだけ付着していた。
美術の時間に、失敗でもしたのだろうか。しかしそうでないことは、
その場にいれば即刻分かっただろう。

少女の足下に首から先を原形を残さず潰され、赤い血溜まりに沈ん
でいる‘モノ’があるのだから。

明らかに死体であるそれを前にしながらもその少女、零崎文織は、
何かを何かに書いていた。

文織が膝の上に開いている一見本に見える物は、表紙から裏表紙ま
で1ページ1ページが鉄できていている百科事典ぐらいの厚さがある、
‘本’だった。

その名を、『レッドインクダイアリー殺人日記』。

文織の異名ともなっている、文織だけの凶器だった。

重量はおそらく、20kgは下らないであろう。

そんな物を自由自在に、しかも片手で振り回せるのだ。文織の實力は、零崎一賊の中でも一目置かれていた。

そんな文織が、凶器である『殺人日記』に一体何を書いているかという、

「えーっと……この男の人の名前、何だったっけ？ 確か、オ、オ……オオコマ？」

どうも、目の前の首無し死体が人間だったときの名前を思いだそうとしているらしい。

よく見ると、『殺人日記』には他にも人の名前らしきものが記されていた。

それらの色はほとんどが赤く、中には黒ずんでいるものもあることから、おそらく殺した者の血で書かれているのだろう。

現に、文織の指は血で染まっていた。

「オ、オ……確か鳥の名前が入ってたから……ああ、もう！ ちゃんと聞いといたはずなのに、なんで忘れちゃうのよ！！」

どうやら文織は、殺す前に相手の名前を聞くようだ。

それでも忘れてしまうとは、なかなかに残念な記憶力らしい。

そんな残念な文織だったが、急に本棚の陰を睨むと、

「っていうかあなたは、いつまで隠れてるつもりなのよ！？」

そう叫び、いきなり『殺人日記』を本棚に向かって投げつけた。すさまじい轟音が響き、ガラガラと棚が崩壊していく。

それでも文織は崩れた本棚を睨みつけながら、

「あなたねえ、いい加減にしないと本気で怒るわよ…?」

殺気を振りまきながら、目の前の死体に足を振り下ろす。

人から放たれた蹴りのはずなのに、死体の腰の辺りが砕け散り、肉と血飛沫が飛び散った。

すると崩壊した本棚の近くから、中学生くらいの少年が両手を上げながら出てきた。

茶色の短髪で、ツンツンにとがらせている。

いたずらっ子を想像させるが、その顔にはどこか暗い影があった。

「ちょっとフミ姉。いくら自分を殺そうとしたとはいえ、仏さんは丁寧に扱わなきゃ。」

若干軽い声で、少年はからかうように言った。

それを聞くと文織はキョトンとしたように、

「え? ってことは、やっぱりこの人私を狙ってたんだ。」

と呟いた。

「ホントに気づいてなかったんだね…。本読んできるとすぐに周り見えなくなるんだから。で、一体何読んでたわけ?」

呆れたような少年の質問に、文織は手提げから先ほど読んでいた文庫本を取り出す。

くどいようだが、その表紙は青い髪の少女だ。

少し薄汚いシートのような物を体に纏っている。

「『クビキリサイクル』。とっても面白いから、是非読んでみて!」

「まさかの宣伝！？っていうか、オリキャラの俺たちが宣伝しているのかな？あとせめて、人間シリーズも宣伝した方が…。」

お互いに、どっちもどちなセリフだ。

「それで吹風、あなたはまた私をストーキングしてたの？」
咎めるような文織の視線に慌てるように、

「ストーキングじゃねえよ！俺はただ、フミ姉に危機が及ばないよう陰から見守ってただけだ！」

フキカゼ
吹風と呼ばれた少年は、弁解する。

「そういうのを、世間ではストーキングと言うのよ。」

「だ〜か〜ら〜、この石風吹風はそんなことしないってば！」

相変わらずの会話だが、聞く者が聞けば戦慄しただろう。

「石風」

それは「零崎」と同じ【殺し名】の序列七位であり、生きているべきではない人間を殺す《死神》であった。

普通、同じ殺し名である零崎と石風がこんな風に普通に会話するなどありえない。

おそらく二人の間には、その普通ではない状態を引き起こす“何か”があったのだろう。

「っていうかフミ姉。フミ姉を狙ってたナイフ、全部弾き飛ばしたの俺なんだぜ？命の恩人に、少しくらいお礼の言葉を言ってもいいんじゃないの？」

吹風が文句を言っているが、文織は完全に無視で放り投げたままだった『殺人日記』を拾うと、再び死体の名前を思い出そうと頭をひねり始めた。

無視されたまま文句を言うのが空しくなってきたのか、吹風は口を閉じた。

しかしあまりにも文織が長い間悩んでいたので、

「フミ姉を殺そうとした奴の名前は、オオツグミ コマドリだよ！
つたく、零崎を始めるとすぐに相手の名前忘れちゃうんだから。フミ姉は。」

「あつ、そうそう。ありがとね。さすが吹風。ちゃんと覚えてたのね。」

「聞いてから10分も経ってないのに、忘れる方がおかしいよ。」

文織からお礼は言われたが、疲れたような返事しか返せない吹風。そんなことには気づかず、文織はまた何か悩み始めた。

「何だよ？まだなんか思い出さなきゃいけない名前があんの？」

他にも数人殺ってたのかよ、と意外そうな吹風の質問に、文織はあっさりと答える。

「うん、だって、

私、来たとき図書館にいた人を全部殺しちゃったから。

死体は全部カウンターの後ろに押し込んだけど、書く名前が多すぎて覚えられないのよ。」

（フミ姉が入ってってすぐ、本日休館って札が出たのはそのせいだよ。）

いつものことだと知ってはいるが、毎回聞いてしまう。

「一応聞くけど、なんで殺した？」

「え？ なんとなくだけど、強いて言うなら、本読むとき邪魔になりそうだったし。」

吹風は、今一度目の前の少女の認識を確かにする。

彼女は殺人鬼でありながら、文学少女でもあるのだ。

理由無く殺し、本のためにも殺す。

それでも吹風は、文織から離れようとは思わない。

どうせ、自分も人を殺す者だ。

しかも自分は、石風を飛び出している。

目の前の少女と、一緒にいるためだけに。

そう納得した吹風は、まだ悩んでいる文織へとこやかに告げる。

「ねえフミ姉、いいアイディアがあるよ。図書館に来てるって事は、みんな利用するためのカードを持ってるでしょ？ それを使って調べれば、名前なんてすぐ分かるよ。」

「スッゴい！吹風って頭良いのね。よし！そうと決まったら早速やりましょう！………死んだ人を、忘れないために。」

そう言う文織と吹風は、地獄絵図となっているであろう図書カウンターに向かった。

『殺人日記』 零崎文織

彼女は文学少女であり、自分が殺した人間を、刻んで、記して、留めるため、相手の名を、自身の武器に書き記す殺人鬼である。

第壹章 異邦人（違法刃）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

自分は今、文才の無さに泣いているところです。

次回がいつになるかは分かりませんが、もう一人の零崎が出てくる予定です。

誤字や用法間違い等の指摘、意見や感想を書いていただけると、本当に嬉しいです。

喜んで小躍りして、小指をぶつけて泣くと思います（笑）

第貳章 時をかける少女（時を翔る少女）（前書き）

今回で、新キャラが3人ほど登場します。

なんだか、無駄に長くなりすぎた気がします。

でも途中で止めずに最後まで読んでいただけると、作者の幸せ指数が30%アップしたりします。

よろしく願います。

第貳章 時をかける少女（時を翔る少女）

文織は、私服姿で商店街を歩いていた。

普段ならその数メートル後ろを、吹風が本人曰く“見守っている”はずだった。

だが吹風は、今現在文織の周辺にはいない。

あの後。

『殺人日記』に全ての名前を書き終えた文織は、満足そうに頷いた後図書館を出ようとした。

しかしその肩を、吹風が掴んだ。

「ちょっと待てよ。殺したのはフミ姉なんだから、後片付けくらいはやっていこうぜ。」

「嫌よ。クビキリサイクルの続きが気になるんだもん。早く家に帰って読まなきゃ。」

さも当たり前のように断る文織に、普段は“見守っている”吹風の額にも、青筋がはしった。

零崎一賊は、基本的に殺戮の後を片付けたりしない。

その方が、零崎一賊の恐ろしさとおぞましさを知らしめることができるからだ。

しかし一賊の長兄『自殺志願』零崎双識が、『四神一鏡』と呼ばれる五家の一つである氏神家に頼んで情報操作を行っている。

そのため、零崎一賊の殺戮が世間に広まることはあまりなかった。しかし最近、その双識がデートなどで不在の時が多いため、殺戮の

後始末ができない状態にあった。

なので、本人たちが後片付けをしなければいけないのだが……

「私は、早く家に帰って続きを読みたいの！！文学少女である私の読書を、誰にも邪魔はさせないわ！！」

「それは分かったから、せめてその血まみれの制服は着替えてけよ！」

「年頃の乙女に服を脱げなんて、なんて恐ろしいことを言うのよ！この変態！」

「ばっ、ちがっ！血まみれで家まで帰るつもりかって意味だよ！！」

「そんなこと言って、私が脱いだ制服を盗んだりするつもりでしよう。」

「……………そ、そんな訳ないだろう！」

吹風が、真っ赤な顔で怒鳴った。

もちろん、吹風はそんなことを考えたりしていない。

純粹に文織の社会的な立場を考えて、血まみれの制服を脱げと言ったのだ。

ただ、文織の制服を盗むということに、吹風の心のある意味純粹な部分が反応したただけなのだ。

「な、何を真っ赤になってるの！？もしかしてホントに……………」

「と・に・か・く！こんな大量殺人事件があったってバレれば、レツ兄が黙ってねえぞ！」

文織が本気で引いてるのを見て、吹風は切り札を使った。
最終手段だけあって、効果は覲面であった。

文織が口を閉じ、その顔は吹風と対称に真っ青になり、冷や汗が流れ始める。

「ひ、ひ、ひ、卑怯よ！兄さんにバラすなんて！」

「別に、レッツ兄にバラすなんて言っていないだろ？この殺人現場の後片付けをちゃんとやれば、最悪行方不明で片が付く。」

真っ青になったまま、ついにはカタカタと細かく震えだした文織。それを見て罪悪感にかられる吹風だったが、これも文織のためだと割り切る。

さらにもう一押し、と吹風が口を開きかけたとき、文織は逆転の一手を思いついた。

「じゃ、じゃあさ！じゃんけんで、決めない？」

「は？じゃんけん？」

「そ、そう！じゃんけんで負けた方が、後片付けをするってこと。」

「何言ってるんだよ。殺したフミ姉はともかく、なんで俺が後始末をしなきゃいけないんだよ。」

「ふーん、負けるのが怖いのか？」

文織と吹風は、小さい頃から一緒にいることが多かった。
だからこそ、吹風は文織が彼女の兄を恐れていることを知っていた。

逆に、文織も吹風についてよく知っている。

【殺し名】といえども、吹風に年相応の負けん気や単純さがあることを。

はたして、

「怖い！？なくに言ってるんだよフミ姉！！そこまで言われたら、やってやろうじゃねえか！！」

吹風は、あっさりと挑発に乗った。

文織という少女は、吹風という少年についてよく知っていた。

彼が、生まれてこの方じゃんけんなどの運任せの勝負に勝ったことが無いことも……

勝負の結果、文織は吹風がなぜか持っていた私服に着替えた後家に帰ることになり、吹風は文句を言いながらも殺戮の後始末をするこ
とになった。

図書館から文織の自宅へ行くには、バスと地下鉄を乗り継ぐ必要がある。

バス停に着くと、運良くバスが来ていた。

文織が乗り込むと、さらに幸運なことに車内にはほとんど乗客がいなかった。

キッチリとスーツを着込んだ、堅実なサラリーマン風の眼鏡の男性。緑色とオレンジに染めた髪をオールバックにしている、ダボツとしたTシャツとボロボロのジーンズを身につけている若い男。

腰まで届くであろう金色の髪をした、日本人離れした顔立ちの少女。この3人しか、車内にはいなかった。

文織は一番後ろの5人掛けくらいの席に座ると、早速鞆の中から文庫本を取り出して読み始めた。

しばらく本を読み進めていた文織だったが、あることが気になって、ページを捲る手が止まっていた。

サラリーマン風の男が、いつの間に取り出したのか音楽プレーヤーで音楽を聴いていた。

ただ、音量が大きすぎるのか音漏れが酷かったのだ。

そのせいで文織は、読書に集中できないでいた。

（あゝ、もう！さっきから何か五月蠅いなく……。あの男の人のせい？殺しちゃおっかな。）

文学少女として、殺人鬼として思案する文織。

だが自覚はしていないものの、文織にはもう一点気になることがあった。

このバスに乗っている3人の乗客達、どこかがおかしかった。

【殺し名】である自分と、どこか似た雰囲気を持っているのだ。

1人だけなら、別に不思議がることではない。

裏の世界の人間と会うことは、特段珍しいことでもなかった。

しかし、3人。

いや自分を合わせると4人の、裏の人間が集まるということは、普通はないことだった。

先程から迷惑だったサラリーマン風の男が、降車のブザーを押した。よく見ると、他の2人もバスを降りる様子だった。

妙な違和感を感じながらも、静かになったのならと、文織は本の続きを読もうとする。

だが次の瞬間、信じられないことが起こった。

（体が、…………動かない!?!）

ページを捲ろうとしても、手が、指が、ピクリとも動かない。
いや、正確には、動いてはいた。

ただし、本人の意志とは関係なく。

何が起こっているのかが全く分からないまま、文織は本をしまわされる。

「星ヶ池く、星ヶ池くバスが止まってから席をお立ち願います。」

運転手の呑気な声と共に、バスが止まった。

すると文織の体は勝手に立ち上がり、バスの出口へと歩を進め始めた。

まるでその文織を囲むように、3人の乗客も出口へと向かう。

（何が起こってるの? 恐らく、この3人が絡んでるのは間違いない。
でも、いったいどうやって? ……………! まさか、これって!?!）

状況を完全には理解できていない文織だったが、自身の異変について、一つの結論を出す。

（操想術!?!）

（っていうことは、この中の1人、もしくは3人全員が、《時宮》
!）

零崎一賊を含む、【殺し名】

それらの対極の対極の対極に位置するのが、【呪い名】
その中の序列一位。

恐怖を司り、操想術という人を操る技を使う、『時宮』、『時宮病院』。

決して人を殺しはせず、零崎一賊以上に人を殺す、恐怖の集団。

文織がそう判断したのを見透かしたかのように、サラリーマン風の男が口を開いた。

「初めまして、零崎のお嬢さん。ワタクシ私、今あなたに操想術をかけています。名を、時宮トキノミヤ時報ジホウと申します。手荒な真似をするつもりはないので、少し、我慢してください。」

気づけば、4人は薄暗い裏路地に立っていた。

表の喧騒が全く聞こえないということは、ここで声を出しても向こうには届かないだろう。

「別に、襲ったりしませんよ。なにせそういう時は、集団の不良がいるのがお約束ですから。」

「……………」

文織が黙っているのを見て、時報はウツカリしてた、というように

「ああ、すいません。操想術をかけっぱなしでしたね。」

そう言うと、さっきから音漏れが酷かった音楽プレイヤーの電源を切った。

次の瞬間、文織は自分の体が自由になるのを感じた。

（音で、操想術をかけていたの？確かに、曲識さんはそうやって戦うけど…。）

やはり、『少女趣味』は【呪い名】寄りだったのかと妙に感心していた文織だったが、目の前の3人に集中しなければと慌てて意識を向ける。

さっきから喋っているのは時報だけで、後ろの二人は一言も発していない。

こいつらも時宮で、用心のため操想術の準備でもしてるのかと思いい文織は質問した。

「えーっと、時報さん、でしたっけ。」

「ええ、そうですよ。」

「あなたの後ろにいる、派手な髪のお兄さんときれいな髪の女の子も、『時宮——』」

文織の言葉が終わるより早く、巨大な殺気の塊が文織に向かってきた。

それが誰かは視認できないが、金色が辛うじて見えた。

咄嗟に文織は『殺人日記』を構えようとするが、迫る殺気の塊が手提げを弾き飛ばした。

ガードも出来ず、絶体絶命となった文織。

（速っ！っていうか、ヤバい！避けられ——）

さすがに死を覚悟した文織だったが、運はまだ文織を見捨てなかったようだ。

文織の頭上から何か別の影が飛来し、文織と殺気の塊の間に立ちふ

さがる。
それは、

「おいテメエら！フミ姉の気配を辿って追いかけてきてみれば、《殺し屋》や《呪い名》が何やってんだ！この石風吹風がいる限り、フミ姉には指一本振れさせないぜ。」

《死神》であるが故に、人の魂を察知することに長けているのは分かる。

しかし端から聞けばストーカー決定のセリフを叫びながら登場した、石風吹風だった。

「助けてくれたのは感謝するけど、そのセリフはいただけないわね。」

あきれ文織だが、先程の吹風の言葉の中に気になる単語を見つけた。

「ちょっと待って、吹風。さっき、《殺し屋》って言った？」

「ああ、さっき襲ってきた金髪の女の子だよ。そこの眼鏡が《時宮》、派手な髪の奴が《奇野》ってところかな。」

吹風の何でもないという風の言葉に、時宮 時報、まだ一言も喋っていない吹風曰く《奇野》の男、先程の殺気は既に消えている《殺し屋》の少女。

その全てが、驚愕の色を顔に浮かべていた。
少しの間路地裏は静寂に包まれ、やがて3人を代表するように、時報が口を開いた。

「石風、ということは、『死神』ですね。なるほど、ならば見破っても不思議はないでしょう。分かりました。時間のように正しく、正面からお話をしましょう。まずは2人とも、自己紹介をしてください。」

時報がそう言うのと、オレンジと緑の髪の男が初めて口を開いた。

「いやあーやっとしゃべれるんだよねそうなんだよねさっきから黙ってるのがホントに辛くてさー参った参った全くいつの時代の拷問だよ俺にいいと言うまで黙ってるなんて！あ？俺の名前？俺に名前を言えって？OK了解承知したよそれでは教えてあげよう俺の名前は奇野^{キノ}翔知^{シヨウチ}！以後お見知り置きをお嬢さんそれでは好物から紹介させてもらうけどーー」

「もういいです。名前だけで十分でしょう。」

マシンガンのように喋っていた翔知だったが、時報の言葉に再び口をつぐんだ。

どうも、時報がこの3人のリーダー格らしい。

時報が金髪の少女に目をやると、少女は何故か苛立たしそうに舌打ちをした後、簡潔に自分の名前だけを述べた。

「私の名前は、少女^{オトメ}時代^{トキシロ}。」

「少女って言えば、『勾宮』の分家か。」

「だから、『時宮』と一緒にされて怒ったんだね。ごめんなさい。」

文織は、時代に頭を下げた。

時代は、ツンと顔を背けただけだった。

【殺し名】 序列一位、殺し屋《匂宮》は、対極の対極の対極である
《時宮》を見たらなぎ払えと教え込まれている。

同じ存在だと思われたら、殺気の一つや二つ、簡単に発するだろう。
自己紹介も済んだところで、再び時報が口を開いた。

「さて、こちらの素性はあらかじめ分かってもらえたと思います。それでは次に、我々の目的について話しておきましょうかね? 『殺人日記』さん?」

【殺し屋】、【呪い名】 双方が集まってまで求めた目的。

それは、

「君の兄である殺人鬼、《滅死生誕》（アンハッピーバースデー）
に会わせてくれるかな?」

第弐章 時をかける少女（時を翔る少女）（後書き）

次回は、短くなると思います。

文織の兄、『滅死生誕』 零崎烈識が登場します。

彼の得物は？ 3人が会いに来た理由とは？

次回では、名も無き一人が犠牲になる予定です。

断章 ハッピー・バースデー（滅死生誕）（前書き）

第二の殺人鬼が登場！相も変わらぬ駄文ですが、お付き合いいただけたら幸いです。

断章 ハッピー・バースデー（滅死生誕）

田中一郎は、物語の主人公になりたかった。自身の平凡すぎる名前。

平凡な周囲の環境。

それらを幼い時から自覚したせいか、一郎は小説などの中の“特別な”人間に憧れてきた。

成長して社会人になり、平凡な会社の平凡なサラリーマンになり、さすがに普通なことでもいいことだと割り切っている。

それでも時には、何らかの物語に参加したいとも考える。

今日、11月10日は、そんな彼の誕生日だった。

一郎はこの誕生日が不満であった。

その理由は、後一日遅く生まれていればゾロ目となり、運命的なものを感じられたというモノだったが。

自分の人生には、特別なことなんて起こらない。

半ばそう諦めながら、一郎は自宅へと帰る途中だった。

一郎の家は、表通りからは少し外れた場所にある寂れたアパートである。

近所でも評判のケーキ屋の角を曲がり、裏路地に入った方が近道になる。

実家の両親から、電話にメッセージでも入ってるかもしれないと思い一郎は足を早めた。

しかし裏路地を少し進むと、通せんぼするかのように立っている男がいた。

一郎はその男に見覚えがあった。

話をしたことはなかったが、さっき曲がったケーキ屋の店員だ。

格好は、Tシャツにジーンズと店とは違いラフなものだった。

「あんた、田中一郎さんであってるとよな？」

店員とは思えないぞんざいな口調で、目の前の男が話しかけてきた。ここはただの裏路地で、客上位の店内ではないから別にかまわないのだが。

「知ってるとは思うけど、俺はそのケーキ屋で働いてる。あんた、今日が誕生日だろ？」

何で知ってる？ ああ、そう言えばこの前ケーキ屋でケーキを注文したっけ。その時に、バスデーカードを送るかもしれないから誕生日を聞かれたんだった。

そう納得した一郎は、取り敢えずうなずいた。

「そうかいそうかい。そりゃあ良かった。いやあ、間違えてたらどうしようかと思ったよ。なんせ、“ここ一ヶ月ずっと我慢してたんだから。”」

妙な事を言う店員だと思いながら、一郎は早く家へ帰ろうと店員を押しのかようとした。

しかしそれをかわして後ろに跳んだ店員は、何故かとても嬉しそうに

「おっとっと、待ってくれよ一郎さん。俺はあんたに、ケーキ屋としてプレゼントを持ってきたんだぜ？」

プレゼント？ と訝しげに首を傾げる一郎だったが、それに構わず、目の前の男は話を続ける。

「それでさ、俺個人からの贈り物として特製ケーキをあげたい訳よ。

別にいいよな？」

態度は気に入らないが、プレゼントを貰えると知って悪い気はしない。

どうせ家に帰っても、やることはないのだ。

ありがたく戴こうと、一郎が店員に近づいた時だった。

店員の男が、何でもないように、取るに足らないことのように、呟いた。

「それでは、零崎を始めましょうか。」

何故急に丁寧な口調になったのか、そして、さっきの言葉の意味は。一郎は、それらの疑問を“聞けなかった”。

目の前が光で真っ白になり、轟音が響いた、気がした。

全く理由が分からぬまま、急速に意識が薄れていくのを感じながら、一郎は考えた。

俺は、「登場人物」になれたのか？

そしてそのまま、意識は果てた。

確かに彼は、登場人物になれた。

突然現れた意味不明の殺人鬼に、為すすべもなく蹂躪され、駆逐され、殺害される。

そんな理不尽極まりない、されどもどこにでもいる、群集モブの一つに。

煙の晴れたその路地裏に、一人の男が立っていた。
Tシャツにジーンズというラフな格好。

その右手には、ライターが握られている。

「たくさんのダイナマイト（ロウソク）と、真っ赤なあなた（イチゴ）で飾り付けた、特製のケーキですよ。」

そう呟く彼の前には、原形などまるでとどめてない真っ赤な“モノ”が横たわっていた。

周りのビルの壁は焼け焦げ、そこら中に血が飛び散っている。

それらの血飛沫は彼にもかかっているのだが、むしろ清々しい表情を浮かべ、

「いやあ、久しぶりだったけど、やっぱ「零崎」は楽しいな！試合後のボクサーが飯をがつく時と同じくらい爽快だよ！」

「零崎」が殺人を示す以上、ボクサーに対する冒瀆ともとれるセリフを叫んだ。

そしてライターをジーンズのポケットにつっこむと、目の前の死体、というよりは肉塊には目もくれず、路地裏を後にする。

彼の名は、ゼロザキ零崎 レッシキ烈識。

ダイナマイトを使う、『滅死生誕』（アンハッピーバースデー）と呼ばれる殺人鬼。

断章 ハッピー・バースデー（滅死生誕）（後書き）

感想・意見等、書き込んでいただけたらやる気が出て執筆スピードがUP！

……………ということになるかもしれない気がしますがどうでしょう？

第参章 家族ゲーム（家賊げーむ）（前書き）

誤字脱字の指摘、感想などあればよろしくお願いします。

第参章 家族ゲーム（家賊げーむ）

路地裏で原因不明の爆発が起き、身元不明、と言うより人間だったのかも定かではない死体が見つかった日の夕方。

街のはずれからはちよつとだけ外れている位置にある、西織家にて

――

「こらこら、肉は1人につき5枚までと言ったでしょう？あなたはもう7枚も食べたじゃないですか。」

「…………うるさい。時宮の指図は受けない…………。」

「まあまあ時報いいじゃない？時代ちゃんだって育ち盛りなんだし少しくらいたくさん食べたってそれに君がさっきから1枚に見せかけて2枚重ねて食べてるのは知ってるぜ？時間のように正しく1人5枚にするんじゃないかったのか？まったく同じ【呪い名】として恥ずかしいよ。」

「そう言いつつ一度に5枚もとるんじゃないやねえよ翔知！誰がこの肉を買ってきたと思ってんだ？」

「この肉を買ってきたのはあなたでなく吹風君だったと記憶してますが？烈識さん。」

「いいんですよ、時報さん。居候が買ってきた肉は家主である私たちの物です。」

「…………ジャイアニズム…………。」

「何か言った？さて、私も育ち盛りだしたくさん食べよ♪」

「待て文織！お前最近体重増えてるだろ？具体的には、3キロほど増えたから――」

「何で知ってるのよにいさん！？この、変態！！」

「流石は烈識かの『自殺志願』に負けず劣らずの家族愛はいつ見ても素晴らしいね～そもそも俺が烈識と会ったのもその家族愛が原因で」

「お前ら少しは静かに食べ～～～！！！！！！」

余りにも混沌としすぎている目の前の光景に、石風吹風は全力でツコンだ。

《死神》の怒鳴り声に、《殺人鬼》も《殺し屋》も《操想術師》も《病毒遣い》も一斉に動きを止めた。

西織 ニシオリ 滯梨 ミオリ こと零崎文織。

その自宅には現在、【殺し名】が4人、【呪い名】が2人在宅中。

（まったく、レツ兄もフミ姉も順応早すぎだろ…。フミ姉に至っては、さつき殺されかけたんだぜ？）

中学生にはそぐわない苦笑いを浮かべながら、吹風はため息をついた。

吹風の怒声に一時は動きを止めたものの、目の前では相変わらず異

形どもが大暴れしていた。

零崎文織は零崎烈識に『殺人日記』で殴りかかり、烈識はそれを軽々とかわす。

時宮時報と少女時代は肉をどちらが多く食べるかで喧嘩をしてるし、奇野翔知は一人長々と烈識との出逢いについて語っている。

吹風が抱いてきた【暴力の世界】のイメージからはかけ離れている光景だった。

「つていうか今更だけど、何でこんなことになってんだ？」

力無く呟く吹風は、つい数時間前のことを思い出す。

「君の兄である殺人鬼、《滅死生誕》に会わせてくれるかな？」
そう時報が言った瞬間、吹風は文織の腕を掴んで逃走を図った。

「ちよっ、吹風!？」

文織が驚きの声を上げるが、吹風は気にせず翔る。

後少して路地を抜けられるというところで、吹風の前に影が立ちふさがった。

「話くらいは、聞いていけ。」

金色の髪をなびかせる、時代だった。

「ちよっ、吹風! 何で急に走りだしたのよ! 転んだら危ないじゃない!」

どこか抜けた事を文織が言ったが、吹風は真剣な顔で怒鳴った。

「フミ姉！！状況をよく見ろよ！【殺し名】と【呪い名】、その二つが零崎を探してるんだぜ！？」

普段は冷静な吹風が、とても焦っている。

文織はそれだけは分かったが、何故逃げるのか、その理由は分からない。

「会いに来ただけ、ってさっき言ってたじゃない？」

「だからフミ姉！！今何が起こってるか知ってるだろ！？」

「今、零崎は戦争をしてるんだ！！」

「小さな戦争」

かつて起こった、「大戦争」。

それと対比させるように、零崎一賊の長である双識が名付けた名だ。理由も、相手も分からぬまま、零崎一賊が狙われている。

「こいつらが、その戦争関連で俺たちを殺しに来たとも限らねえ。

しかも一人は殺し屋だぞ！」

頼まれれば誰でも殺す。

それが、「殺し屋」。

零崎一賊を狙うのに分家が一人とは些か役不足な気はするが、【呪い名】もいるのだから油断はできない。

目の前の時代、そして背後の時報と翔知に対して殺意を振りまく吹風。

その殺意を感じとってか、時代の目も細くなる。

「とにかく、そこをどけよ。」

「私を、倒してから。」

「少年マンガかよ…。」

そう言うと、吹風は時代に向かって走りだした。

文織は事態に付いていけないのか、ポカーンと吹風を見送っただけだった。

時代は、懐から二本のダガーナイフを取り出すと、両手を交差させるように構えた。

吹風もどこからか、『石風』である証の大鎌デスサイズを取り出した。

闇で塗り固めたかのような、漆黒の鎌。

吹風はそれを大きく振りかぶると、真上から振り下ろした。

時代は斬撃を片手のナイフで“弾き飛ばす”、もう片方のナイフで吹風の喉を狙う。

文織が助けに入ろうと慌てて手提げに駆け寄ろうとしたとき、

爆音が、響いた。

その轟音に時代も、回避しようとしていた吹風も一瞬だが動きを止める。

その隙を見逃さず、時報が腰の音楽プレーヤーに手をかける。チックタツクという時計の針の音が流れ始め、時代と吹風の体の自由は奪われた。

「時代、私たちは争いに来たものではありませんよ。」

そう諭す時報だったが、目には冷たい光が溢れていた。

文織も吹風も、今まで感じたことのない冷たい殺意に息を呑む。

「――！――！――！」

そんな二人とは対照的に、時代は吹風以上の殺気を時報に向けている。

どうやら罵詈雑言をぶつけてやりたいようだが、操想術によって体の支配権は時報にある。

「もう一度だけ、言います。あなたの兄である殺人鬼、『滅死生誕』に会わせてください。」

「理由は、何なんですか。」

先ほどとは打って変わって、とても落ち着いた声で文織は尋ねた。だが、その手は手提げの中にある『殺人日記』に置かれている。

「なんでわざわざ、殺人鬼なんかに出会おうとしてるんですか。」

その問いに時報は、無言で首を振ることで答えた。

そして、音楽プレーヤーを切ると文織達に背を向けた。

「翔知、時代、行きましょう。さっきの爆音は、おそらく『滅死生誕』のダイナマイトでしょう。今から行けば会えるかもしれません。」

そう言うと、後は文織達に目も向けずに路地の向こうに歩き去った。翔知は、しょうがないなどとも言いたげに首を振ると、無言で時報の後に付いていった。

「……………」

時代もまた無言のまま、しかし目には溢れんばかりの怒りを溜めながら、小走りで時報の後を追った。

「行っちゃったね…。」

三人が立ち去ってから、しばらく経った。

沈黙が支配していた路地裏で、文織の呟きはやけに大きく聞こえた。

「いいのかよ、フミ姉。あいつら、レッツ兄のどこに行ったんだぜ…。」

吹風が力なく尋ねる。

【殺し名】とは言ってもまだ中学生。

実戦経験も誇れるほどは経験していない。

そんな吹風にとって、時報の放った殺気は、精神をすり減らすには十分だった。

路地に座り込み、うなだれている。

「私たちが行っても、意味はないでしょ。にいさんに危害を加える気がないなら本当に意味はないし、危害を加えるつもりでも、私たちが行ったところで何にも出来ない。」

実力差が、大きすぎる。

零崎の中でも一目置かれているとは言え、文織も実戦経験はある方ではない。

【呪い名】序列一位の『時宮』相手に善戦できるとは、当の本人である文織も思っていなかった。

「これから、どうすんだよ…?」

再びの沈黙を破るように、吹風が尋ねる。

文織はしばらく考えるような素振りを見せた後、明るく答えた。

「今日の夕ご飯は、すき焼きにしようか?」

「はぁ?」

「お肉がなかったから、買いに行かなきゃね」

普段と変わらない口調で喋りながら、文織は歩き始めた。

「お、おいフミ姉!! だからレッツ兄はどうすんだよ!？」

「だからさっき言ったでしょ。行っても意味はないって。にいさんなら、一人で何とかするわよ。」

それだけ言うと、文織はさっさと表へ出て行ってしまった。

読めない、と今更ながらに吹風は思う。

彼女を追って『石風』を飛び出したが、彼女のことを俺は何も知らない。

今の態度、家族への信頼と見るべきか、家族愛の薄さと見るべきか。正反対のベクトルの可能性を含んでいる。

「よく、分からねえよ…。」

誰にともなく、呟く。

いつか正しく、あの文学少女を理解できるのだろうか？
いつか正しく、あの殺人鬼を理解できるのだろうか？

死神として。

石風吹風として。

「分からねえよ…。」

再び呟くと、吹風は立ち上がる。

どうせあの少女は、自分のことを待ってるだろう。

か弱い乙女に重い荷物を持たせるなんて何事よ！

とでも言いたげな顔で。

吹風自身気づいていないが、彼は時報との実力差に落ち込んでいた。それを察した文織が、わざと話題を変えることで気を紛らしてくれたことに吹風が気づくのは相当後になってからである。

（時宮時報、少女時代、奇野翔知…。今度会ったら、絶対に負けねえぞ…！）

「ああ、また会いましたね。石風の少年。」

「なんで俺らの家の前にいるんだよ！？しかもレッツ兄まで！？」

表向きは西織家として使っている、文織、烈識、吹風が住んでいる自宅。

スーパーで安売りしていた牛肉を買って帰ってきた二人がそこで見たのは、【呪い名】&【殺し名】with烈識だった。

「あなたは居候でしょ？吹風。」

どこか抜けたツツコミを文織がしているが、吹風はそれどころではない。

「レッツ兄！！そんなとこでのんびりしないで早く逃げろよ！こいつら、零崎を狙って

「何を言ってるんだ？吹風。確かに時報と時代には今日初めて会ったが、翔知と俺は知り合いだぞ？」

「ええええええええええ！？」

驚愕の事実！

文織も吹風も、とても驚いている。

『ネッシー発見!ただし近所の児童公園みたいな!』

「ど、どうして、にぃさんが【呪い名】と……？」

未だに混乱から覚めないのか、
どもりながら文織は尋ねる。

吹風も同感らしく、中々な速度で頷いている。しかしそんな真剣な二人に対し、烈識は特に重要な風でもなく、

「いや、ちよつと前にシンが【呪い名】に首突っ込んだ時があつた
 だろ？翔知とは、その時知り合つたんだよ。」

そう言った。

文織は納得したようだが、吹風は何のことか分からないように首を傾げている。

「シンって、誰のことだよ……？」

「零崎の一人だよ。昔、家出してな。」

「はあ!？」

【殺し名】からの家出。

それがどれだけ過酷で壮絶で大変で命の危機に晒される所業か、体

験者として吹風は知っている。

もつとも、それは『石風』での話だ。

【殺し名】 序列最下位にして最も異端という立場からか、あまり追っ手にも真剣さが無かった。

ちなみに余談だが、吹風は自分と同じように『石風』から逃げ出した萌太をいたく尊敬している。それはともかく、家族愛の強さ故に【殺し名】の中でも忌避されている零崎一賊から家出とは、想像もつかない荒業だ。

「で、にいさんが【呪い名】と知り合いなのは分かったけど、なんで時代たちがにいさんに会いに？」

そう尋ねる文織だったが、烈識は聞こえないかのように文織の手にあったビニール袋（吹風が買って、吹風がここまで持ってきて、鍵を出すために文織に手渡したもの。）を引つたくと嬉しそうに叫んだ。

「おおー！今日はすき焼きでもするのか！？嬉しいねー、まるで俺の久し振りの『零崎』を祝ってくれてるみたいじゃないか！」

「双識さんが後処理できないから、『零崎』は控えろって言ったのはレツ兄だったよな！？」

烈識の言葉を聞いて、思わず時報たち3人のことを忘れて突っ込んだ吹風

「「そうだっけ？」」

「なんでフミ姉まで首傾げてんだよ!？」

こうなったら、二人とも俺の大鎌『断罪』で折檻してやろうかと、実力的に不可能なことを妄想している吹風だったが、

「あの〜吹風くん、であってますよね？」

存在が忘れられていた時報が、遠慮がちに尋ねた。

「あ？何だよ？」

まだ時報のことを警戒しているのか、（実際はさっき負けたのが気に入くないだけ）つつけんどんな態度で吹風は答える。

その厳しい視線に時報は少し後退りするが、不意に真剣な顔になり吹風を見つめた。

「まず始めに、あなたに言わせていただきたいことがあります。」

ついに、尋ねてきた理由を明かすのかと吹風は身構え、

「今日の晩食であるというすき焼き。私たちも、相伴させていただけないでしょうか？」

「【暴力の世界】は馬鹿ばかりかーーーーー!？」

そんなこんなで、結果的に時報たち3人を加えた6人での夕食だった。

「さて、そろそろいいか？」

不意に、烈識が口を開いた。

時刻は既に日にちが変わる時間を過ぎており、夕食を食べた居間には烈識と時報たち3人しかない。

3人に対して全く警戒心を持っていない文織も、訝しんでいる吹風も、今頃は布団の中だろう。

「今日、いや昨日か。文織がやらかした後始末、やってくれたんだってな？ありがとよ。」

「気にすることはないさ烈識そもそも後始末といっても現場自体はきれいに片づけられていたし俺らはやられた人間の情報を消去すればよかったんだしなにより俺とお前は親友じゃないか！！親友の間には小さいことに関する礼なんて

「分かったから少し静かにしてろ翔知。」

「OK了解承知したよ。」

「そもそもお前は殆ど何もやってないだろ？どう考えても、時報にしかできないだろそんな事。」

「お褒めにあずかり光栄ですよ。」

「シンの奴がいてくれたら、レン兄の手も煩わせずにすむんだけど

な。」

「《滅死生誕》、《鋼鉄迷宮》（アイアンプリズン）、《消憶葬室》（バニッシングルーム）と言えば、彼の『零崎三天主』に次ぐ実力者と言いますからね。」

「格好良く聞こえるけど、要はレン兄やアス兄やトキ兄よりも格下ってことだよ。」

「でもよ、烈識。文織ちゃんだって実力者だろ？『殺人日記』とか、『死に急ぐ者』（ランナーズデッド）って異名もあるんだし。」

「二番目のは異名の意味合いが変わってくるんだが……。まあ、わざとらしいキャラの設定公開も十分だろ。あんまりダラダラと会話を続けると読者も飽きるしな。」

「いいんでしょうか、そんなメタ発言。」

「気にするな。それより、時代が一言も喋ってねーな。一応、この場には4人いるんだが。」

「……………」

「まっ、そろそろストーリーも動き出すだろうし、本題に入ろうぜ。」

「《鋼鉄迷宮》こと、リズが襲われたってのは、本当なんだな？」

『殺人日記』

11月10日

大鵜 駒鳥

以下略。20名

第参章 家族ゲーム（家賊げーむ）（後書き）

本編でも烈識さんが言っていました、キャラの簡単な紹介をさせていただきます。

零崎 文織

『殺人日記』

『死に急ぐ者』

本使い（？）

文学少女でもある殺人鬼です。

彼女の零崎への想いが、物語を左右します（……………予定です。）

零崎 烈識

『滅死生誕』

ダイナマイト使い。

この異名は、烈識の武器に由来するものではありません。

どちらかというと曲識さんのタイプです。

零崎としての制約は分かっている人もいるでしょうが、次回明かされます。

リズ

《鋼鉄迷宮》

シン

《消憶葬室》

殺人鬼です。

今後、物語に絡んできます。（……………予定です。）

時宮 時報

操想術師です。

この人にも色々と裏やら何やらがあって、それもいつか明かしたいです。

奇野 翔知

病毒遣いです。

上記のシンが家出した時、烈識に協力しました。

お互い、何だかんだで信頼しています。

【暴力の世界】には珍しい、善人に近いタイプです。

少女 時代

殺し屋です。

名前は殆どネタですが、結構重要な事も含んでいます。

名前に「時」が入っている理由。

それが、鍵になってきます。

キャラの設定は、こんな感じです。

正直予定が多いので、この通り進むか分かりません。

とにかく、少しでもストーリーを動かしていきます。

ちなみに時系列は、竹取山の数日前です。

次回は、原作キャラの変○がちょっとですが登場します。

口調とかが不安ですが、とにかく頑張っていきます。

第㊦章 告白（酷薄）（前書き）

この作品に関する、意見、感想、誤字脱字の指摘等が頂けたら幸いです。

第㊦章 告白（酷薄）

——零崎一賊が一人、『鋼鉄迷宮』ことリズが襲撃された——

話題の当人であるリズ自身はまだ出てこないが、“零崎一賊が襲撃された”、という事実が重要だ。

その事実について詳しく語るためにも、時間は文織たちの前から時報たちが立ち去った時に戻る。

「おっ？ 誰かと思えば翔知じゃねえか。久しぶりだな、2年振りくらいか？」

そんな言葉とともに、零崎烈識は路地裏から現れた。

夕日が路地裏を照らしているせいか、烈識の顔やこれといった特徴もないTシャツが真っ赤に染まっているかと言え、そうではない。いや、真っ赤ではあるのだが、それは夕日によるものではない。

明らかに夕日とは違う、生物の血の色だった。

しかしたとえ烈識が真っ赤でなくとも、先程出てきた路地の奥から死臭が漂ってくれば、人死にがあったのは明白だろう。

「人を、殺したのですか…？」

目の前に殺人鬼がいるだけでも心中穏やかではないだろうに、その殺人鬼がついさっき人を殺したならば、より一層注意しなければいけない。

尤も、人を殺す、殺さないが殺す【呪い名】である時報が言うにはいささか滑稽な台詞であったけど。

そう感じて慎重に言葉を紡ぐ時報だが、手は腰の音楽プレーヤーに当てられている。

時代も、知り合いである翔知さえも、油断ならない目で目の前の男を見つめている。

そんな殺伐とした空気を知ってか知らずか、烈識は3人を見渡すと、
「ああ、殺したぜ？一ヶ月振りの『零崎』だったんだけどよく正直簡単すぎて、欲求不満っていうか、」

それはつまり、

「プロのプレイヤーがいれば、殺り合いたって感じなんだが。」

まだ殺し足りないという意味で、

「お前ら、プロだよな？」

その瞬間、烈識と時報は腰に手をやり、時代はダガーナイフを手に突貫した。

しかし

烈識の手が腰から離れるよりも、

時代のナイフが烈識に突き刺さるよりも、

時報の音楽プレーヤーが静かに音を奏でるよりも、

全ての動きよりも早く、

動きも、時間も、全てが止まった。

「ダメだぜ？ そんなに簡単にバトルパートに突入したら作者の貧弱な語彙力じゃ表現するのに苦労するんだからっていうかそもそもこの章では『鋼鉄迷宮』が襲われ――」

「おい翔知！ リズが襲われたってどういう事だ！？」

さり気なくメタ発言も含めながら、かつ3人が烈識に伝えたかった事をサラリと暴露しながら、マシンガンのように喋り始めた翔知を遮るように、烈識は叫んだ。

しかし動かしたのは口のみであり、他の部位はどんなに力を込めても微動だにしない。

「…まったく、参りましたね。恐怖で動きを縛るはずの『時宮』が、逆に縛られてしまうとは。」

自身も体を動かせない時報が、自嘲気味に呟いた。

時代は殺気を込めた目で、翔知を睨んでいる。

そんな2人を気にした風もなく、翔知は変わらず喋り続ける。

「体の硬直は操想術によるものではないならばどの様に動きを止めたのかそれは毒だ空气中にある種の毒を気化させた状態で流せば付近の人間は指一本動かさなくなるその名も『石化の霧』（ゴーゴン・ミスト）！」

「誰に向かって説明してやがる！ いいからこの毒を何とかして、さ

っきの話について詳しく教えろ！」

「悪いけど、この毒の解毒薬ってのは存在しないんだ。」

「はぁ!？」

要は、このまま、体が硬直した状態で話を聞けという事らしい。

殺人鬼を抑えつけるために、仲間諸共縛り付けるというのは些か乱暴かもしれないが。

「確かに、烈識さん。あなたが零崎一賊の殺人鬼である以上、理由もなく我々を殺そうとする存在である以上、私たちの為にもそのままでいていただけるとありがたい。」

「え? 何言ってるんだよ、そんな訳ないじゃないか。」

時報の要望に対し、意外そうな声を上げたのは烈識ではなかった。その隣にいた、緑とオレンジの髪をオールバックにした男だった。というか、翔知だった。

普段はガトリングのような勢いで喋る翔知にしては珍しく、セリフが数行で終わっているし、句読点もしっかりついている。それ程、時報の指摘が意外だったらしい。

「翔知、どういう意味ですか? 全員が殺人鬼である零崎一賊。そんな人外と戦って、私たちが勝てるはずないじゃないですか。」

自分達の身を守るために烈識を縛った。

しかしまるで、烈識は自分たちを殺そうとしないと言っているようじゃないか。

そう思った時報は、翔知に尋ねた。

しかしその疑問に答えたのは、翔知ではなく烈識だった。

「いや、俺は零崎にしては珍しい奴でさ。“相手の誕生日にしか殺さないんだ。”」

「「は？」」

時報だけでなく、さっきから黙ってばかりだった時代も、思わず間の抜けた声で尋ね返した。

零崎一賊は、理由なく人を殺す。

しかし例えば、『少女趣味』という殺人鬼がいる。

『自殺志願』、『愚神礼賛』の2人と並んで、【零崎三天王】と称されている。

しかし彼は、自身の殺戮に制限を設けている。

とある大戦争の最中に会った、たった一人の少女のために。

そんな彼と同じで、零崎烈識もまた殺戮を制限していた。

彼が殺すのは、その人間が生まれた日のみ。

誕生日に殺す

相手が生を受けた、その日に殺す。

誕生日に、‘死’を生み落とす。

故に、『滅死生誕』（アンハッピーバースデー）

それが、烈識という男の全てだった。

翔知も、時報も、時代も今日、11月10日は誕生日ではない。

いや、正確には分からない、と言った方がいいだろう。

そもそも【暴力の世界】で、自分が生まれた日など何の役にも立たない。

同じ名を持つ者達が祝ってくれるという、ほのぼのしたイベントなど起こらないのだ。

「ちよ、ちよっと待ってください。ならば何故、翔知は私達を縛ったのですか？」

烈識の事情も分かった。

自分たちが恐らく襲われないであろうことも分かった。

しかし逆に、時報の頭は混乱するばかりだった。

襲われる心配がなかったのなら、何故自分達は縛られているのだろうか。

「ああ、時報達が襲いかかったから、それを止めるために。因みにその前の緊張した表情ってやつ？あれノリだから。」

実にあっさりと、翔知は説明してくれた。

説明があっさりしていればしているほど、怒りと殺意は湧くのだが。

「なる程、そういうことですか…………。」

目の前の男に対する殺意を何とか抑えながら、冷静な口調（にしよ
うと努めながら）で時報は呟いた。

時代や烈識はその冷たい殺意に若干怯えているが、向けられている
翔知はどこ吹く風だ。

それを見て、怒りも殺意も無駄だと判断したのだろう。
時報は再び、烈識に話しかけた。

「さて、烈識さん。我々の言うことを信じろと言うのも難しいでしょう？」

「そりゃあな。相手が【呪い名】ってだけでも油断は出来ねえんだ。翔知もいるが、【呪い名】の話を信じろって言われてもな……。」

洩る烈識だが、時報達には最初からその返答は予想できていた。時報が目配せをすると、翔知が時報のポケットから携帯を取り出した。

そのまま翔知は、どこかに電話をかけると、烈識の耳にその携帯を当てた。

烈識の耳に聞こえてきたのは、

「うふふふふふ、元気かい？ 烈識くん？」

次の瞬間、「石化の霧」で動けないはずの烈識の手と指が、光速に近い動きで通話終了ボタンを押していた。

それを見て翔知たち3人は、どこか哀れみを込めた、またこの結果に対する諦めを込めた、そんな目をしていた。

対する烈識はどうかというと、真っ青になり、冷や汗を滝のように流していた。

「烈識、さん？ 今の電話、切っても良かったんですか……？」

「……………」

一応聞いておこう、という感じで時報が尋ねるが、烈識は無言を貫

いている。

が、よく見ると小刻みに震えている。

その時、今度は烈識のジーンズのポケットが振動した。

烈識はしばらく無言で震えていたが、時報たちからの視線を感じたのか、意を決して携帯を取りだした。

「うふふふふふ、イケないな、急に電話を切るなんて。」

その声を聞いて再び通話終了ボタンを押しかけた烈識を、翔知が必死になって抑えた。

心の中で何かが戦っているかのような表情をしながら、やっと烈識は口を開いた。

「お、お久しぶりです。レン兄…。」

余談だが、烈識は零崎を始める時には敬語になる。

死んでいく相手に敬意を払うためだと、よく本人が言っている。

しかし、そんな彼でも、自分よりも目上の相手には零崎は関係無く敬語になる。

具体的には、自身よりも格上のプレイヤー、過去に世話になった恩人、人類最強の赤色などだ。

そして今話している相手もまた、敬語を使うべき人物だった。

『自殺志願』 零崎双識

恐ろしくおぞましい「零崎一賊」の長兄にして、恐ろしくおぞましい変態だった。

「それでレン兄、一体どうしたんですか？今俺の所に【呪い名】が来て、リズが襲われたって言ってるんですが…。」

何とか落ち着くことに成功した烈識は、ひとまず時報たちについて聞いてみた。

時報の携帯から双識の携帯につながったということは、今回の件について双識が何かしらの情報を持っているのだろう。

「ああ、真面目な話だよ烈識くん。」

急に深刻な口調になった双識に合わせるように、烈識も真剣な目になる。

「聞いて喜んでくれ！なんと子荻ちゃんが、私をデートに誘ってくれたんだ！！」

双識のおかげで、数秒も持たなかったが。

「直前のシリアスな空気を返してください！」

それでも敬語でツツコむ烈識は、根は真面目なのかもしれない。

「シオギって確か、レン兄のメル友でしたっけ？今は戦争中なのに、愉しそうですね…。」

「そうだろうそうだろう？烈識くんも、もっとリアルを充実させなきゃ。」

（……………皮肉が通じてね。っていうか、シオギってどっかで聞いたような…。遊馬の姉さんの話に出てきたんだっけ？）

「まあ、ここ数日の内は、アスと一緒にやらなきゃいけないことがあるんだけどね。」

「アス兄と？」

この二人がタッグを組むなんて、珍しいこともあるモノだと思いいながらも、烈識は話を戻すことにした。

「それでレン兄、リズが襲われたってのは

「本当だよ。」

それは、感情が余り感じられない言い方だった。

しかしそれは逆に、感情を押さえ込んでいるかのようにも聞こえた。

「そう、ですか…。」

烈識の声も、端から聞けば平坦に聞こえる。

「幸い、命は助かったみたいだけどね。今は、知り合いの家で眠ってるそうだよ。」

「それで、襲った奴は分かっているんですか？」

「まあ、分かっているんだけどね…。」

静かな声に怒りと殺意を含ませながら、烈識は尋ねる。

が、それに答える双識の声は歯切れが悪い。

「レン兄！一賊がやられたら、一賊総出で復讐に走るのが零崎（俺たち）でしょう！？分かってるなら早く――」

「……………」

双識が答えた瞬間、烈識は絶句していた。

その瞬間、烈識は全てを繋げることが出来た。

何故、時報たち【呪い名】と『勾宮』の分家が、わざわざ零崎一賊の自分を訪ねてきたのかが。

「それで、俺はどうしたらいいんでしょ。うか。」

「奴」は恐らく、次は君を狙ってくる。周りの人間諸共ね。申し訳ないけど、私とアスは別件でそちらに行けない。……いいかい、烈識くん。文織ちゃんを、それと預かってるって言う石風呂の少年。君が“家賊”と呼ぶ者を、しっかり守るんだよ？」

それだけ言うと、電話は切れた。

（アス兄とレン兄が一緒ってことは、相当ハードなんだろう。こっちに来てもらうってのはやっぱり無理なんだろうな…。）

まつ、しやーねえか。

そう呟くと、烈識は時報たちを見据えて叫んだ。

「全ての事情は理解した！【殺し名】七名序列三位、零崎一賊が一人！『滅死生誕』零崎烈識は、全力を以て“奴”に対抗しよう！！」
こうして、【殺し名】2名、【呪い名】3名の、驚異にして脅威のチームが生誕した。

夜の町を明るく照らし出すネオン。

その光すら届かない、闇の、さらに奥にある闇。

そこでは、6人ほどの人間が集まっていた。

否。

6人ほどの“生きた人間”が集まっていた、と言った方がいいだろう。

何故なら、彼らの足下には一人二人どころではない、少なくとも数十人と呼べる規模の、“死んだ人間”が“敷き詰められているのだから”。

「相変わらず派手だよね。リーダーは。」

軽い青年の声が、感心したように呟く。

「それにしてもこんなに殺して、表にバレないのかしら？」

若い女の声が、特に気にした風もなく尋ねる。

「キャハハ！馬鹿だなあ、バレたらバレたで、そいつを解^{バラ}しちゃえ

ばいいじゃないか！」

まだ幼さの残る少年のような声が、楽しそうに囁し立てる。

「五月蠅いぞ。我ら〔六枚羽〕は、暗殺が専門なのだ。『バレたらバレたで』など言っておれるか。」

重い男の声が、静かに諫める。

「で、でも、もしこの人たちが、じ、実はマフィアの仲間で、わ、私たちに、復讐とかしてきたら、どどどうしよう…?」

震える少女の声が、脅えるように怯える。
最後の一人は、まだ口を開かない。

「さて、標的の顔は全員覚えてたろうな？ 厄介なことに“奴ら”は手を組んだらしいが、それでも一人一殺で

「で、でも、あの、“駒鳥”（コマドリ）さんが、殺されちゃったから…。」

重い声の男の声を、怯えた少女の声が遮る。

「ああ、そーいやアイツ、死んだんだっけ？」

「自分一人で十分だって“図書館に突撃して”、敢え無く討ち死よ。」

「キャハハ！ あいつ、バツカじゃねーの？ って言うか、駒鳥の奴が死んだから今は“五枚羽”ってか？」

「…………俺が行こう。」

仲間の死に三者三様、いや五者五様の反応を見せていたとき、黙っていた“六人目”が口を開いた。

「俺が、行こう。」

もう一度そう呟くと、再び口を閉じた。

周りの五人は驚いていたようだが、次第に口元には笑みが浮かぶ。重い男の声が静かに告げる。

「それでは、明日の夕刻より始めるとしよう。“鳥たちの狩り”を。標的は、『零崎一賊と少女時代、及びその周囲の【呪い名】』だ。」

第㊦章 告白（酷薄）（後書き）

さて、如何だったでしょうか？

双識さんの口調というか、喋り方がうまくできたかどうか…。

次回からは、バトルパートに突入です！（折角今回、翔知さんが止めてくれたのに…。）

とにかくひたすら頑張ります！

それではまた、次回に会うときまで。

ちなみに今現在、テスト週間の真っ最中です。

勉強しろよ（笑）

第五章 ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争） 一日目（前書き）

バトルパート突入！

………の筈でしたが、次回からです。

今回は、突入の導入部分です。

それでは、お願いします。

第伍章　ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争）　一日目

「に、西織！放課後、屋上に来てくれないか？大事な、話があるんだ！」

そんな思わせぶりな台詞を、顔を真っ赤にしながら、大真面目な顔で言った少年がいた。

その少年の目線の先には、長い三つ編みに黒縁の眼鏡。

手には、何やら難しそうな古典の文庫本。

見た感じの第一印象が、『文学少女』な女の子だった。

「……………私、本読んでただけど…？」

自分の決死の告白（の前振り）に対するリアクションは一切無く、若干非難めいた目線を投げ掛けてくれる少女に、少年の心は折れそうになる。

それでも何とか持ち直すと、

「じゃ、じゃあ、待ってるからな！」

それだけを大声で言うと、走り去っていった。

顔は、もう耳まで真っ赤になっていた。

もし今のが、男子と女子の立場が逆だったならば、告白の成功はほぼ絶対だろう。

しかし、男子が告白の前振り後に顔を真っ赤にしながら走り去ると、成功確率は減る気がする。

どうなのだろう。

と言うか、「乙女か!」とツッコみたくなるのだが。

「ちょっと、五月蠅いよ?」

地の文を読んできた少女の笑顔が怖いので、先に進めることにする。
何故なら、この少女の近くに置いてある手提げ。

その中には数十キロの鉄の塊が入ってるのだから。

今更だが、一応言っておこう。

先程の少年に『西織』と呼ばれ、(ほぼ)告白された少女。

彼女の本当の名は、「零崎文織」である。

現在、文織がいる場所。

それは、高校の図書室。

『小さな戦争』の頃は、かの零崎一賊の鬼子、零崎 人識は『汀目 俊希』と名を変えて中学校生活を送っていた。

それと同じ様な殺人鬼は他にもいるのだ。

表世界から完全に姿を消した者。

自ら積極的に表世界へ関わろうとする者。

表と裏を、巧く行き来しながら生活している者。

同じ「零崎一賊」と言っても、同じ「殺人鬼」と言っても、その生き方は様々だ。

そんな訳で、文織も「西織 滯梨」と名乗ることで近くの公立高校

に通っていた。

この学校を選んだ理由を、文織はこう語る。

『古い本から新刊まで、すごい沢山の本があったから！』
実に、『文学少女』らしい理由である。

（さて、一応授業後にはなったけど…どうしよう？めんどくさいな
〜）

退屈な授業も終わり、続々と生徒たちが帰って行く。

そんな中、文織は学校指定の鞆を両手で持ちながら自分の机の前で突っ立っていた。

そもそも文織は、彼が自分に告白をしようとしているなど、全く考えていない。

単に、用事があったから、呼び出されただけ。

そういう、認識だった。

文織は今まで大量の本を読んできたため、知識量は豊富である。

しかし、その知識を現実には反映させることが出来なかった。

具体的に言うならば、『好きな異性を屋上に呼び出して告白するところがある』、という知識を文織は知っている。

読んできた小説の中には、そういうシーンがいくつもあった。

だが、そこから『だから自分も告白を受ける』という考えが思い浮かばないのだ。

本の世界に、閉じこもっている。

本の世界に、挟まっている。

現実の人間と、上手く接することが出来ない。

自分に向かってくる相手に、対処できない。

本には、自分が向かっていくだけだから。

（まあ、一応行ってみよっかな？ 大事な話って言ってたし。）

その大事な話というのが、自分への告白だという考えには、思い至らない。

文織が鞆を肩に掛けて教室から出ようとしたとき、

「みーおーおーりーりー！！」

甲高い声とともに、茶髪の少女が文織に突進してきた。

『廊下を走ってはいけません』

そんな標語に真っ向から喧嘩を売り、右ストレートで倒してしまい
そんなスピードでだ。

裏の世界に名を馳せる文織でもその超スピードの不意打ちをかわす
ことは出来ず、

「むぎゃ」

と、文字通り曳かれた蛙のような声を上げ、華麗に宙を舞った。
対してぶつかった方の少女は、

「いやあ、ゴメンゴメン。やっぱもうちょっと速度落とさない
と、ブレーキが効かないわ」

特にこれといった外傷もなく、平然と廊下に仁王立ちをしている。パツと見た感じでは、男子と見分けがつかないショート髪。

勝ち気そうな、パツチリとしたつり目。

制服から伸びる手足は、小麦色の健康的な日焼けになっている。

可愛いというよりカッコいい、ボーイッシュといった言葉が似合う少女だった。

「相変わらず元気ね、飛鳥^{アスカ}。それと、全くブレーキを掛けようとしてなかった様に見えたのは私の気のせい？」

文織が、笑顔を浮かべながら廊下の端から戻ってきた。

流石は裏世界の住人と言うべきか、こちらも外傷を負っている様子はない。

だが笑顔といっても、青筋は浮かんでいるわ顔にもものすごく陰影がついているわと、どこからどう見ても明らかに怒っている。

そんな鬼神の如き文織（殺人鬼）を前にしながらも、

「もお、相変わらず滯梨はクールだな。嬉しいときは、嬉しいって言おうよ！」

全く気にすることなく、飛鳥と呼ばれた少女は文織に抱きついてくる。

「今の私が嬉しそうに見えるなら、眼科へ行くことをお勧めするわ。」

「またまた、ツンデレってもう流行らないよ？」

「ちなみに聞くけど、今私は何を喜べばいいのかしら？」

「このあたし、橋里^{ハシリ} 飛鳥^{アスカ}に、出会えたことよ！」

「取り敢えず、病院に行こ？保険証なら、私に取りに帰るから。」

なんともマイペースな飛鳥に、文織も次第に顔が綻んでくる。

このように、文織は決して“現実が嫌い”なわけではない。

学校生活も、飛鳥や他の友人たちのお陰で楽しく過ごしている。

裏表なく、裏の住人である自分と接してくれる。

そんな飛鳥たちが、文織は本当に大好きだった。

殺意なんて、かき消すくらいに。

「それで、何の用？今日、陸上部は？」

恐らくあの少年はもう屋上にいるだろうから、急がなければと文織は思ったのだが、飛鳥が中々離れてくれないので聞いてみた。

飛鳥はこの高校では、そこそ有名な人である。

入学後すぐに陸上部に入部して以来、常に大会などで新記録を打ち出しまくってるのだ。

自分では「日々の練習の賜物だ」と言っている飛鳥だが、裏の住人である文織から見ても飛鳥のスピードは天賦の才によるものだった。

「ああ、部活ね。それがさ、ホントは今日有名な陸上選手がコーチの代わりに来てくれる予定だったんだけどさ。何か昨日から連絡が付かないみたいで。」

楽しみにしてたんだけどさ

そう残念そうに、飛鳥は呟く。

ちなみにその陸上選手、スポーツ界でも有名な本好きであり、珍しい本があると聞いて昨日この町の図書館に向かったのだが……これ以上は、言う必要はないだろう。

「それで今日の午後が暇になったからさ、滯梨と一緒に帰ろっかなって。」

「そっか……でもゴメン。私、今ちょっと呼び出されてて。」

「え？滯梨が？メツチャ優等生なのに？何したのよ滯梨。あんたが職員室に呼ばれるなんて。人でも殺した？」

勘違いをしている上に、笑えない冗談を言う飛鳥。文織も勘違いに気づき、

「いや、別に職員室に呼ばれてる訳じゃ

「まっ、何かあったら相談しなよ？あたしとあんたは、親友なんだから！じゃ、職員室早く行きなよ？また明日！」

訂正しようとしたのだが、飛鳥は勘違いしたまま猛スピードで去っていった。

「…………廊下は走っちゃ危ないよ、飛鳥。……………」

文織もまたそう呟くと、屋上へ向かっていった。

「は～は～は～、…疲れた……………」

まだ、屋上に辿り着いていなかった。
誰が？

もちろん、文織がである。

「この学校、何でこんなに階段が長いのよ…！」

叫ぶ声にも、心なしか元気がない。

ちなみに皆さん。

皆さんの学校では、屋上に向かう階段などあっただろうか？
屋上というのは危険な場所だ。

事故が起きる確率も高いだろう。

そのため、屋上への出入りを禁止している学校だってあるかもしれない。

いや、最近では禁止している学校の方が多いかもしれない。

さて、そこで文織の通っている学校はというと、屋上への出入りは禁止されていない。

しかし代わりに、屋上に行けないようにする策があった。
それが通称、『無限回廊』と呼ばれる化け物階段だった。

学校内にあるというのが信じられない長さで高さを誇り、屋上に行く気無くさせる階段だった。

「真夜中にこの階段を昇ると冥界に辿り着く」、という七不思議まである曰く付きだ。

「あの人、よくこんな所を文学少女に登らせようと思ったわね…。」

そうまでして伝えたいことって何よ？

そう思いながら、ようやく文織は屋上へのドアに辿り着いた。
あの人は、もうずいぶん待っただろうなと思いながら、文織はドアを開けた。

次の瞬間目に入った光景に、流石の文織も動きが止まった。

確かにあの少年は待っていた。

いや逆に、“首だけしかなかったから”、待っているしかなかった
と言わなきゃ。

少年は無惨に、首切り死体になり果てていた。

もう血は流れきったのか、首の切断面からは何も流れてはいない。
代わりに、屋上は血の海になっていた。

激しい鉄の匂いに、むせかえりそうになる。

かつて首の下に繋がっていた胴体は、綺麗なまま、血の海の中に沈
んでいる。

「えっと…、何これ？」

その文織の声は、目の前に広がる惨劇に対する自問、ではない。

「これ、あなたがやったんじゃないの？」

少年の首を掴んだまま屋上の床に胡座をかいて座っている、巨大な
男に対する質問だった。

坊主頭に、細い目。

首には、巨大な数珠をかけている。

服装は修行着のような物の袖を破ってノースリーブのようにしてい
る。

「ああ、この小僧を殺したのは儂だ。」

重みのある声で、男は答えた。

「貴様を殺すのに、邪魔だったのな。」

「ふん。」

「流石は殺人鬼。自分に告白しようとした者が殺されても、顔色一つ変えないか。」

感心したように言う男に対し文織は

「え？その人、私に告白しようとしてたの？本とかでよく見る、愛の告白ってやつ？」

「呆れた奴だ…。」

少し気の抜けた声でそう言った後、男は首を掴んだまま立ち上がった。

身長は180センチをゆうに越え、下手したら2メートルはあるかもしれない。

全体的に筋肉質であり、ゴツいという表現がしっくりくる。

「今さっき出会ったばかりの貴様と儂だ。話すことも、そう無いだろう。悪いが、仕事はさっさと終わらせるに限るのでな。」

そう言いつつ、男は背中へと手を伸ばす。

「そうね。仕事（零崎）は早く始めるのに越したことはないわ。」

文織もまた、手提げから無骨な鉄の塊、文織が最も“愛読”する本、『殺人日記』を取り出す。

「それが、『殺人日記』か。【罪口】が作った“失敗作”と聞いておるが？」

「非道いことを言うのね。私が最も好きな本なのに。」

「生憎と僕は、昔から本が嫌いでの。活字を見るだけで頭が痛くなつたものだ。」

ゆっくりと互いに歩み寄る二人の間には、既に殺気が満ちている。

「最期に一つ、聞いておきたいんだけど？」

あと数歩で、相手を殺せる距離になったとき、文織が尋ねた。

「“あなたの名前は、なんて言うの？”」

凄絶な笑みを浮かべながら、そう聞いた。

その笑顔に背筋がうすら寒くなったが、男もまた不敵に笑い、重い声で答えた。

「僕は、暗殺専門集団、ウグイスジヨウヒエン「六枚羽」が一枚、鶯城 飛燕。貴様の命、貰い受ける！」

「そう、分かったわ。あなたの名前は、決して忘れない。刻んで、記して、留めてあげる。」

『殺人日記』を構えると、文織は駆け出した。

「【零崎一賊】が一人、『殺人日記』零崎文織…。」

「零崎を、行います。」

第伍章　ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争）　一日目（後書き）

どうもです、星神です。

まず最初に、

名も無き少年に、哀悼の意を込めて…。

本当にあの子の名前、考えてないんですよ。

可哀想なことしたな…。

さて、次回から『本当に』バトルパートに入ります。

まあ、作者の文才によっては、すぐに終わってしまうかもしれないが。

ちなみにこの「戦争」、タイトルみたいに七日も続きません。

一日かそこらで終わります。

次々回からは、残りの「六枚羽」のメンバーに出てきてもらいます。そのせいで、暫く（見苦しい）バトルシーンが続きますが、許してください。

この作品に関する意見、感想、誤字脱字の指摘を、お待ちしております。

それでは、また。

第陸章　ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争）　二日目（前書き）

もう一つ書き始めた作品の執筆で、更新が遅くなるかもしれません。
部活も忙しいので…。

すいません。

なるべく頑張ります！

第陸章　ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争）　二日目

「零崎」の発動を宣言すると同時に、文織は大きく跳躍した。ただでさえ、文織と飛燕の身長差は大きい。

更に、『殺人日記』は基本的に撲殺用のため、相手の頭部を狙う必要がある。

そのため、必然的に跳躍によってその差を消さなければならない。しかし跳躍は、空中で無防備な姿を晒す危険がある。

（だからここは、先手必勝！一撃で決める…！）

一気に飛燕の目の前まで跳ぶと、『殺人日記』を斧のように振りかぶり、振り下ろす。

喰らえば人間の頭蓋骨など、一瞬でバラバラだ。

文織のスピードなら、常人には瞬間移動に感じられ、気付いた時にはあの世逝きだろう。

しかし、

「確かに、仕事は早く済ませるのが一番とは言ったがな、急いては事を仕損じるとも言うだろう？」

目の前の大男は、やはり常人ではないらしい。

飛燕は背中から“本物”の斧を取り出し、『殺人日記』の一撃を受け止めていた。

渾身の一撃を受け止められた文織に、動揺による隙が生じた。プロのプレーヤーが、その隙を見逃すはずもない。

「それにな、後手必殺とも言うだろう？」

そう聞こえた次の瞬間、文織はコンクリートの床に激しく叩きつけられていた。

「がっ…！」

「この程度か？」

少しつまらなさそうに言うと、飛燕は腰から、更に鉦なたを取り出した。文織も身を起こすと、再び『殺人日記』を構える。

「その武器では僕には勝てぬよ。身長差もあるが、その前にリーチの長さで勝負にならん。」

斧も鉦も近接戦闘向きだが、それでも百科事典ほどの大きさの『殺人日記』よりは遠距離に攻撃できるだろう。

「……………まだまだ！」

再びの跳躍。

しかし、ダメージのせいかな先ほどのようなスピードはない。そんなスピードのないただのジャンプなど通じるはずもなく、

「ハエが止まるぞ！」

易々と受け止められ、今度は上空に弾き飛ばされる。

『殺人日記』を抱えたまま落ちてくる文織の目に、鉦を振りかぶり、落下地点に走ってくる飛燕が映った。

どうやら、落ちてくる文織を両断することでケリを付けるらしい。

「つまらんな！『殺人日記』！これなら儂が、貴様と“『滅死生誕』”の両方を相手取っても良かったわ！」

“ペキン”

そんな音と共に両断されたのは、飛燕の持つ鉞の方だった。

「何っ………！？」

突然の出来事に、飛燕の動きが一瞬止まる。

その一瞬の隙に、今度は斧が手から消えている。

文織が『殺人日記』で鉞を折り、手から斧を弾き飛ばしたのだと気づく頃には飛燕が宙を舞い、床に叩きつけられていた。

「馬鹿な…！あの状態から、どうやって…？」

確かに文織は、足場も何もない空中にいた。

しかも、重い『殺人日記』を抱えたまま頭から落下していたのだ。

鉄製の鉞を折るほどの一撃を、そんな不安定な体勢から撃てるはずがない。

「貴様、一体………！」

叫ぶ飛燕を気にした風もなく、文織がゆっくりと顔を上げる。

その顔を見た瞬間、飛燕は今までに感じたことがない恐怖を感じた。

例えるなら、深き洞。

何も見えず、見ているだけで吸い込まれ、消えてしまう。
そんな映像が浮かんでくる。

さつきまでは、まだ“人間”の顔だった。

しかし今の文織の顔は、“鬼”と言うよりも、“機械”。

ただ目の前の生物の生命活動を停止させることを目的とした、冷たい殺戮兵器。

殺戮を楽しむのではなく、殺戮を義務とする。

（呑み込まれる）

反射的に、飛燕はそう感じた。

「貴様は、貴様は一体…!？」

震える声で問い掛ける飛燕に対して、文織は何も答えない。

鉈を折ってから、文織は一言も言葉を発していない。

その事が、飛燕の恐怖を加速させる。

文織が空中に“飛び”上がると、『殺人日記』を右手で掴んだまま空中で一回転。

そのまま飛燕に向かって叩きつける。

漸く我に返り、ギリギリでかわす飛燕。

（なるほどな…。）

文織の空中での一回転を見て、飛燕にはどうやって文織が鉈を叩き折ったのが理解できた。

つまり、“それ”を分析できる程度には、飛燕は冷静さを取り戻せ

たということである。

（あの鉄の塊の重さ、それに遠心力を加えたのか…。）

文織は『殺人日記』の重量と、回転による遠心力を利用し、普通の数倍の衝撃を産んでいたのだ。

喰らえば人間の体など、瞬時にバラバラになる程の。

飛燕の鉋を叩き折ったのも、空中で身を振り『殺人日記』の重さを利用して、回転スピードを増したことで可能にしたのだろう。

（奴の攻撃を一撃でも喰らえば、全てが終わる。しかし今の状態で、あのスピードを見切るのは難しい。）

ならば手は一つ。

その一撃に耐えうる“盾”を用意すればいい。

「儂の得物が、斧と鉋だけで終わりだと思ったか？」

そう言いながら、飛燕は更なる“武器”を取り出した。

それは、大型の斧、乃ち鉋。まさかり

しかも、さっきまで飛燕の手にあった斧がミニチュアに見えるほど巨大な物だった。

妙に冷めた目をしている文織の顔を見て、飛燕は口元を歪ませる。

「そんな巨大なもの、一体どこから取り出した？とも言いかけたな。取り敢えずそれには、『四次元ポケット』からと答えておこう。」

飛燕の似合わない冗談によって、文織の目がさらに冷たくなった気がした。

しかし確かに、飛燕の持つ巨大な鉞を破壊するには相当な破壊力が必要だろう。

その破壊力を産むための“溜め”もまた長くなり、結果的に隙を作ることになってしまう。

まさに、“盾”であり“武器”でもある“得物”であった。

「さて、やはり仕事は早く済ませるに限……………うお！」

のんびりと鉞を構えようとしていた飛燕に、文織は飛びかかった。慌てて飛燕の振るった鉞と『殺人日記』が激しくぶつかり、文織の方が吹き飛んだ。

「今度こそ逃がさん！」

文織が落下するであろう地点へと、疾走する飛燕。

鉞を振りかぶり、次こそ真っ二つにしようと思いきや、勢い良く振り下ろす。

その時

「零崎を狙って、無事で済むと思ってるの…？」

不意に、文織がそう呟いた。

いや、実際は呟いてなどいなかったのかもしれない。

『零崎一賊』の一人にでも手を出せば、その者は残りの一賊全員から狙われることになる。

彼らはその“家賊愛”故に、【殺し名】の中で最も忌避されているのだから。

そんな不安が、飛燕の耳に文織の声として囁いたのかもしれない。しかし飛燕に、迷っている暇はない。

（どの道、『滅死生誕』も殺すつもりなのだ！それにここで動きを止めれば、目の前の殺人鬼に殺される！）

「終わりだ！
『殺人日記』
！」

その絶叫に答えるかのように、「ザクリ」という音が響き、屋上を新たな赤い血が染めた。

ドサリという重い音と共に、文織は血溜まりの中に墜落した。

[illegible]

屋上には、飛燕の聲が響きわたる。

その顔に浮かぶのは、仕事が達成できたことによる安堵か。それとも、仕事とは言え零崎に手を出したことへの恐怖か。果たして、飛燕の顔に浮かんでいたのは、

“喉を切り裂かれた痛みに歪む、苦痛の表情”

だつた。

喉はパツクリと裂けていて、紅い血が次々と吹き出している。

先程の声も笑っていたのではなく、絶叫しようとして空気が漏れていたのだろう。

対して墜落した文織の方は特に怪我もないようで、ゆっくりとだが起き上がった。

その手に掴まれている『殺人日記』。
そのページの先が、微かにだが赤く濡れている。

【罪口】の異端、「罪口綴里」^{ツミグチツヅリ}が生みだした“成功作”、『殺人日記』。

それは、ただの撲殺用の凶器ではない。

時には鈍器になり、時にはページの先についている刃が剣となる。
打撃と斬撃、その双方を兼ねる、>超近距離専用万能凶器<である。

さてここで、文織がどうやって飛燕を切り捨てたかを説明しておこう。

まず飛燕が聴いた幻聴。

あれは、実際に文織が呟いた言葉だ。

『零崎』を狙う危険性を改めて思い出した飛燕の動きには、僅かにだが躊躇いが生じる。

その小さな隙を逃さず、文織は全力で『殺人日記』を振るった。

しかし飛燕も、無防備なまま突っ込んできたわけではなかった。

万が一文織が反撃してきた場合を考えて、咄嗟に鉞の刃で急所を防御出来るよう、構えていた。

なので文織が狙ったのは、鉞の刃ではない。

いくら文織の腕力でも、いくら『殺人日記』が斬撃を可能としても、鉄を切り裂くことは出来ない。

それならば、一体どこを狙う？

文織が狙ったのは、“鉞の柄”だ。

鉞の刃の様に分厚い部分を切り裂くことは出来ない。

そこで文織は、鉞の細い部分であり且つ鉄製ではない柄の部分を、下から掬い上げるように切り裂いた。

その勢いのまま腕を伸ばし、飛燕の喉を掠めるように切り捨てた。

無理な体勢だったため受け身はとれなかったが、制服が血で汚れた程度で済んだのだ。

この一連の行動が瞬間的に行われた結果、飛燕は自身の血と、自身の殺した少年の血の中に俯せに沈んだ。

まだ息はあるようで、ヒューヒューと息が漏れる音が聞こえる。しかし、いずれ出血多量で冷たくなるだろう。

飛燕もまた、そのことを分かった上で覚悟を決めていた。

文織は、そんな飛燕を冷めた目で眺めていたが、不意に飛燕に駆け寄った。

そして飛燕を仰向けにした後、優しく微笑みながら覗き込んだ。

（何を、している…？ 儂を助けようとも言うのか…？ それとも…。）

笑顔のまま文織が行ったのは、“後者の方”だった。

“笑顔のまま『殺人日記』を振り上げ、優しく声を掛けた、”

「あなたの名前、ウグイスジョウ ヒエン。私が、刻んで、記して、留めてあげる。“だから安心して、死んでね。”」

その言葉を聞き、振り下ろされる鉄の塊を正面から見たとき、飛燕の胸には覚悟ではなく後悔だけが残っていた。

（なぜ、なぜ“あの男”に乘せられて、零崎に手を出したのだろう。あの男の“身内殺し”に巻き込まれたせいで、儂は――）

そんな伏線を残しながら飛燕の意識は、闇に消えた。

「えーっと…名前、名前…。……………何だっけ？」

刻んで記して留めると言っていたはずが、いつの間にかキレイサッパリ忘れていた文織だった。

学校の成績はそこまで悪くない、どちらかと言えば優等生に分類される文織だが、『零崎』を発動している間は記憶が飛びやすくなるらしい。

「うーんと、えーっと、……………、そうだ！ウグイスジョウ ヒエン！」

だが今回は、何とか思い出すことに成功したらしい。

早速書き始めようとした文織だったが、その指がふと止まり不安そうな表情が浮かぶ。

「……………にいさん、大丈夫かな…？」

微かな呟きに答える者はなく、首のない死体が二つ、少年の生首が一つ、そして殺人鬼が一人佇む屋上を、秋の冷たい風が吹き抜けた。

まるで、何かを奪い去るかのようになり、強く。

第陸章 ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争） 二日目（後書き）

安○先生…、文才が、欲しいです…。

次回からはバトルバトルまたバトルです！

この作品に関する意見・質問・感想・誤字脱字の指摘、いつでも待っています。

それでは、また。

第質章　ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争）　三日目（前書き）

随分と遅くなってしまう、申し訳ありませんでした……！！

無駄に長い上に作者の苦手なバトルシーン（そもそも得意なシーンなんてn（殴）ですが、読んでいただければ幸いです。

それでは、お願いします。

第質章　ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争）　三日目

さて、みなさんも予想できているだろうが、文織が飛燕と戦闘していたのと同じ頃、

時宮　時報もまた、襲撃を受けていた。

「アンタが、時宮時報？悪いけどアンタの首、貰いに来たぜ。」

そんな言葉と共に、時報の前に二十代くらいの男が現れた。

薄い緑色の髪が腰まであり、前髪で顔の右半分を隠している。

これまたライトグリーンのコートを着込み、顔には薄ら笑いが浮かんでいる。

「いきなり首を貰いに来たって言われても、何がなんだか分からないか？」

どこか不快な、妙に軽い声を発しながら、その男は時報に近づいてくる。

男との距離が“3メートル”を切ったとき、時報は腰に手をやった。途端に、時報の音楽プレーヤーから物悲しいメロディーの曲が流れ始める。

それを聞いた“周りにいた人々”は、波が引くように“二人”の周

囲から立ち去っていく。

そう、現在時報がいる場所。

それは、西織家からそう遠くない場所にある大型ショッピングモールだった。

ちょうど吹き抜けになっている広場のようなスペースで、買い物客でごった返していた。

……さっきまでは。

今はもう、二人の人間しか残っていない。

キツチリとしたスーツに身を包み、黒縁の眼鏡をかけた男。
腰まであるライトグリーンの髪で顔を隠している、コートの人。

その二人だけが、残っていた。

しばらくの沈黙の後、眼鏡の男、時報が語りかけた。

「驚きましたね。まさか私の、『孤独主義』ロンリーウルフが効かないとは。」

「別に、驚く事じゃねーだろ。アンタが音を使った操想術を好んで使うのが分かってくれば対策は幾らでもある。」

対するコートの男は、相変わらずの薄ら笑いを浮かべながら何でも無いという口調で返した。

「音ってのは、要は空気の振動だ。距離さえ取れば、威力は弱くなるさ。」

確かに、二人の間の距離は必要以上に大きい。

時報は何も言わず、音楽を止めた。

動く物の無くなったフロアを、沈黙が包み込む。

「さて、取りあえず俺はアンタを殺さなきゃいけないわけなんだが…自己紹介くらいはしといてやるよ。俺は、

「暗殺専門集団〔六枚羽〕が一枚、『長槍使い』の鶴見^{ツルミ} 百舌^{モズ}…で
しょ？」

コートの男、百舌よりも先に、時報はその名を言った。
百舌の顔が、苦笑で歪む。

「あれあれ？アンタ、俺のこと知ってんの？」

「こんな大勢の人混みの中、ここまで堂々と“暗殺”しに来るとは思っていませんでした…。自分が狙われている、という自覚くらいはありますよ。尤も、狙われていると言うより“とぼっち”です。」

時報がため息を吐くと、百舌が背中に手を回しながらおかしそうに笑った。

「ヒヤハハ。自分で首突っ込んでよく言うぜ！ってことは何か？俺たちの情報も殆ど流れてるってことか？」

「ええ、あなたがその背中に隠した長槍を使った不意打ちを得意としているのもね。」

途端に百舌は笑顔を引っ込め、憎らしげに時報にむかって舌打ちをした。

「あゝあゝ、そういやアンタ、『長槍使い』って最初に言ってたか。何から何まで筒抜けってか？」

「いえ、別に何でもは知りませんよ。知ってることだけ。」

「…………お前との共通点、眼鏡だけじゃねえか。」

しかも、フレームは丸くなく四角である。

そして、さりげなくメタ発言。

「それじゃ、俺がアンタの苦手とする遠距離戦を得意だったのも知ってるだろ？」

そう言いながら、百舌の背中から巨大な槍が現れた。

リーチはちょうど、3メートル。

折り畳み式で、三節棍の先に刃が付いているような形状をしている。その槍を時報に向けて構えながら、百舌は一步踏み出した。

「悪いけど、“リーダー”の命令でアンタを殺す。化けて出るとか、やめてくれよ？」

百舌の言葉を聞いて、時報の顔に微かな笑みが浮かんだ。

百舌がそれを不審に思った瞬間、

「ああ、分かったよ。化けて出たりはしねえさ。その代わり、アンタにはここで死んでもらうけどな。」

聞き慣れない男の声がショッピングモールに響いた。

第三者の介入かと百舌は辺りを見渡したが、声の主は見当たらない。

「何探してんだ？アンタの目の前にいるだろ？“俺は”。」

「何のつもりだ…！」

先程までの軽い口調ではなく、低い真剣な声で百舌は呟いた。
その百舌の目の前には…

「別に、大した意味はねーよ。これが本来の口調だって言っちゃまえばそれまでだ。」

“百舌に似た声で、”

“百舌に似た口調で、”

話す時報の姿があった。

「ふざけんな。気持ち悪い猿真似しやがって。」

いや、実際“それ”は既に、百舌の声そのものなのだ。

本人が出しているつमりの声と、周りに聞こえている声には高さな
どに差がある。

故に百舌には「自分に少し似た声」と認識されているが、もはや物
真似や声真似などの芸から逸脱したレベルで時報は喋っている。

「ふざけてなんていねーよ。それよりいいのか？アンタは俺を殺さ
なきゃいけないんだろ？急に口調が変わったくらいで、動揺してん
じゃねーよ。」

時報の言葉に、百舌は歯ぎしりする。

対して時報は、さっきまでの百舌のような薄ら笑いを浮かべている。

“まるで、百舌本人のように”

「…………『破矢贅』！」
ハヤニエ

百舌はなんの予兆も示さず、ノーモーションで手にした槍を突き出した。

凄まじい速度で走ったその槍は、時報の頬を薄く切り裂く。

「よく、今の一撃をかわしたな。」

「やっぱり、聞いてたのと実際に見るのでは違うな。完全に避けたつもりだったんだが。」

百舌が感心したようにそう言いながら槍を引き、時報もまた感心したように呟きながら、前髪をかきあげた。

最初の一撃をかわされた百舌だったが、意外にも落ち着いた様子で再び槍を構え、時報に尋ねた。

「おいアンタ、結局どこまで知ってんだ？そもそも、『六枚羽』自体が世間に出てねえ暗殺集団だ。それをどこで知った？」

「とりあえず、アンタらの構成は知ってるぜ。…………アンタを見たとき、クロサギが来なくて良かったって思ったからな。」

具体的な情報元は明かさず、はぐらかす時報。

百舌もその態度にムカつき、再び攻撃を仕掛けるかに見えたが、

「なる程ね。確かに俺も、逆の立場ならアイツだけはゴメンだ。」

逆に槍の構えを解き、また薄ら笑いを浮かべていた。

「アイツの“アレ”だけは、どうしようもねえからな。」

「初めて“アレ”を見たとき、コイツにだけは逆らっちゃいけねえって思ったからな…。」

「実力だけで言えば、アイツが『六枚羽』のリーダーだろ。」

「違いねえや。」

妙に、意気投合している二人。

しかし、よく見るとお互いの目は鋭く相手を睨みつけている。隙を窺っている…のだろう。

事実、時報の手は既に腰に伸びているし、また百舌の槍の切っ先も再び時報に向いている。

「アンタは何で、“リーダー”と戦ってるんだ？」

不意に、百舌がそう尋ねた。

「“あの人”が手に負えねえのは、アンタだってよく分かるだろ？」

“あの人”は無茶苦茶だ。本当に、滅茶苦茶だよ。」

それは時報に隙を作らせるためのモノ、という訳でもなさそうだった。

単なる好奇心か、純粹な疑問か。

そこまでは分からないが、百舌が本気で知りたがっているのは明らかだった。

そんな質問を投げかけられ、時報は腰から手を離した。

一瞬真剣に考え込むかのように、目を閉じる。
しばらくの沈黙の後、その答えを微笑と共に放った。

「零崎の得意分野、とでも言っておこうか。」

またも、具体的な答えではなかった。

しかし、具体的ではないからこそ百舌は一瞬考え込み、時報はその一瞬の隙を突いて再び腰に手を伸ばす。

「なっ!?!…………『破矢贅』!!」

辛うじて突き出した一閃は、一瞬前まで時報の腕があつた場所を通過した。

「ちっ!」

時報は舌打ちをすると、距離を取ろうとしてか後ろへ跳んだ。
しかし、

「『百枚舌』ヒャクマイジタ!!」

その跳躍に合わせて跳んだ百舌が、時報よりも上空から下向きの激しい刺突を幾つも放つ。

一瞬早く跳んでいたためギリギリで飲み込まれずに済んだ時報だが、受け身を取ることができず床に転がる。

「『直鶴閃』！！」
チョツカクセン

更に上段から槍を振り下ろして追撃する百舌。

「このっ…！」

しかし時報にはギリギリで当たらず、数センチ横の地面に槍の先がめり込んだだけだった。

体勢を立て直した時報は再び距離を取ろうとしたが、

「これで終わりだ！……『破矢贅』！！」

すぐさま槍を引き抜いた百舌が、時報に向けて槍を突き出す。

予想よりも早いタイミングの攻撃に、時報は反応できない。

槍が時報の体に到達するまで後数センチとなり、そして、

“百舌は、その手に持っていた長槍を、勢いよく後方へと投げ飛ばした。”

クルクルと宙を舞った槍は、床を貫き、垂直に突き刺さった。

“まるで『百舌のはやにえ』の様に…。”

「は…？」

槍を投げた百舌本人が、なぜ投げたのか理解できていないかのよう

な声を出した。

呆然とした表情のまま、自分の両手と時報を交互に見ている。そこに、

「ようやく、効いてくれましたか。あなたにもう、打つ手はありませんよ。」

どこからか、聞き覚えのない声が聞こえてきた。

いや、本当なら聞き覚えはあるべきなのだ。

その声を初めて聞いてから、まだ10分経っていない。

しかし戦闘の途中で、無意識の内に意識することを放棄した。

『本来の口調ではない』と、目の前の相手自身が告げたのだから。

しかし、当たり前のように、

とてつもなく自然に、

まるで、こちらが本当に本当の口調であるかのように。

時宮時報は、最初に喋っていた口調で『終局』を告げた。

な、何を言ってやがる！

そう、百舌は叫ぼうとした。

“叫ぼうとした”

つまり、実際口は動かなかったのだ。

“まるで、操想術にかかったかのように。”

（馬鹿な……！確かに何度か近寄りはしたが、音の届く範囲じゃなかったし、何より音は聞こえなかった……！）

そう“思考はするが”、“発言できない。”

そんな百舌を見ながら、時報は先ほどまでの薄ら笑いではない、しかし、にこやかすぎるが故に薄ら笑い以上に作り物のような笑みを浮かべながら、

「あなたの敗因は、“私が音を使った操想術を得意とする”、という情報に頼りすぎたことです。」

「得意とする」、と言うことは、「それ以外の方法が使えない」、と言う意味に直結はしないのですよ。

そう、時報は言い放った。

「喋り方、声のトーン、ちょっとした仕草。その全てが、操想術に繋がるのですよ。」

この辺りで、タネあかしをしておこう。

百舌が時報に対して攻撃できなかった理由。

それは勿論、“操想術にかかっていなかったから”と言う理由に他ならない。

確かに百舌は、時報の『音を使った』操想術を封じるため常に距離を取るか音を流す余裕もないほど激しい攻撃を連続で放っていた。しかし時報は、こう言った。

得意Ⅱそれしか使わないことにはならないと。

音以外で操想術にかける方法など、文字通りごまんとある。その中で今回時報が使った方法は、

“百舌の、物真似”

正確には、『喋り方、声のトーン、ちょっとした仕草』。

相手の特徴を理解し、相手そっくりに行動する。そうすることで、

“相手に自分を、相手自身だと誤認させる。”

元々人間は、自傷行為を忌み嫌う。

自殺もまた、本能的には拒否している。

そして戦闘において、相手が自分自身だったならどうだろう。

“自分に殺気を、向けられるだろうか。”

相手の認識を狂わせ、攻撃そのものを封じる。

戦わず、闘わない

最凶の非戦闘集団である【呪い名】そのものであるこの技の名は、

『時宮時告流操想術第八時・姿見』スガタミ

相手の動きを利用して、操想術を発動する。

時報は決して、音を使った操想術しか使えないわけでは、ない。

そもそも音を使った操想術しか使えないなど、【時宮】として失格だ。

いくら時報が、

“【時宮】を初めて追放された、後に『初代・時宮時刻』と呼ばれる張本人、時宮^{トキノミヤ} 時告^{ジコク}”だったとしても。

【時宮】の中で最も【時宮】であつたために、追放された者。【時宮】史上最強の操想術師と呼ばれた男が、その程度のはずがない。

「あなたは【時宮】を、舐めすぎです。」

その台詞に込められたのは、怒りか、侮蔑か、それ以外の感情か。分からないが、時報の目に冷たい殺意が宿っていることだけは確かだった。

「――――！！――――！！！！」

何かを叫ぼうとしている百舌を気にも留めず、時報は腰にあつた音楽プレイヤーを取り出し何か操作している。

恐らくは百舌を殺すための、何かを。

（くそっ……！ちくしょう……！どうする、どうすればいい……！？どうすればいいんだよ！）

焦り、恐怖、絶望、後悔

それらの感情が波となって、百舌の身体を、精神を苛む。

（死にたくねえ…、死にたくねえよ…。まだ、死にたくねえ！！）

今まで数々の人間を殺してきた、暗殺してきた人間がそんな事をわめいても、滑稽なだけだが。しかし恐怖を司る【時宮】に対して恐怖を抱くことは、至極真つ当な反応なのだが。

そんな百舌の心の内が伝わったのか、時報は笑顔でこう言った。

「安心してください。あなたを“殺したりはしませんよ。”」

その言葉を聞き、百舌は一瞬安堵したかに見えた。

しかし彼は気づいていない。

と言うより、死への恐怖から忘れてしまっている。

世の中には、“殺意”でなく“悪意”で動く者達がいることを。

例えば、姿を見せない暗殺者のような。

例えば、『人類最悪』と称される狐のような。

そして例えば、【殺し名】の対極の対極の対極に属する【呪い名】のような。

そのことに最後まで気づかず、鶴見 百舌は、その人生を終えるだろう。

一生を、廃人として、ベッドの上で。

彼の記憶に、最後に残ったもの。

それは時宮 時報の冷たい“悪意”をたたえた底冷えのする笑みと、

「“時宮時告流操想術” 第零時にして廿四時『時告』^{トキツゲ}」

時宮時告が追放される原因となった『史上最悪の操想術』の名だった。

「ふう…。」

ショッピングモールから出てきた時報は、短くため息を付いた。

ついさっきまでの戦闘。

パツと見た感じ、時報の圧勝に見える。

しかし額面通りに受け止めるには、この“一連の戦闘”は些か複雑だった。

（まさかここまであからさまに攻めてくるとはね…。）

苦笑しながらも、時報は思考を巡らす。

（私のところに偶然偶々、“彼”の雇った連中が来た、というのは流石に楽観的すぎますね。他の皆のところにも刺客は放たれている、と考えた方がいいでしょう。）

そして、

（「六枚羽」の一人、イヤ一枚ですか。とにかくあの集団を構成していた中で、大鷲駒鳥は既に死亡。“彼”が狙っているのが“私たち六人”だと仮定すると……一人足りない。）

考えながらも、足は別の場所に向かっている。

昨日会ったばかりの零崎の青年や少女に、石風の少年。

そして必ずしも深い関係とはいえない少女と青年。

もし彼らの誰かの元に、“彼”が向かっていたら……

（勝ち目は、ない……！！）

焦りからか、自然と足が早まる。

二対一で何とかなる“彼”ではないが、時報は町を駆け回る。

（戦ってはいけない。戦っても勝てない……！！————あの最悪と言うしかない、混種^{キメラ}には……！！）

第質章　ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争）　三日目（後書き）

えゝ、何なんでしょうこの展開。

時報さんの設定は元々あった設定なんです、このタイミングで明かすことになろうとは…。

今の“彼”の話が終わったら、時報さんを軸に置いた話になると思います。（その前に、いつ今の話が終わることやら…。）

次回以降はまた、別のメンバーがバトります。

（主人公であるはずの文織が後にならないと出てこないって、この小説何かおかしいだろ…。怪異の仕業か？）

第鉢章 ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争） 四日目（前書き）

随分と遅くなってしまいました。

明日からテスト一週間前ですが、頑張って更新していきます！

……………何か間違ってる気が…………？

第鉢章　ぼくらの七日間戦争（殺人鬼たちの七日間戦争）　四日目

さて、みなさんも予想できているだろうが、文織と飛燕が戦闘していたのと同じ頃、

少女　時代もまた、襲撃を受けていた。

ちょうどその時、時代はある殺気を追っていた。

“敵の襲撃に備えつつ、町の散策を楽しんできなさい。”

そう、個人的にはとてつもなくムカつく笑顔で時報に送り出された時代は、言われたとおりにするのも癪だったが取り敢えずは町をブラブラと歩いている途中だった。

（あんな“時宮”と一緒にいるなんて耐えられなかったから外に出たけど、そもそも町を散策と言ってもそこまで賑やかでもないし、観光スポットみたいなものもない。こんなの、何を楽しめって。）

普段は無口・無表情をつらぬく時代だが、心中で呟くときだけは翔知並みの饒舌になるらしい。

そもそも【殺し名】であるはずの自分が、なぜ【呪い名】なんかと一緒にいるんだ、とらしくもなく愚痴のように呟いた瞬間、

「――――！？」

時代は、感じた。

途方もない、殺気を。

【呪い名】である時報や翔知が、こうもあからさまに殺気を放つわけがない。

また、昨日会ったばかりの零崎文織や零崎烈識、石風吹風の殺気とも、違う。

そう思い、感じた時代は一つの可能性に辿り着く。

（もしかしたら、“あいつ”……………？）

本当は、考える必要など無かった。

一つの可能性どころか、一つしかない可能性だ。

彼女が慣れ親しんだ、感じ慣れた、“彼”の殺気。

「……………零崎や【呪い名】の手を借りるまでもない。私がここで、ケリをつける……………！」

そう呟くと、珍しくも感情を込めて呟くと、時代は駆け出した。

感情を表に出すことが少ないため（そもそもなるべく感情を生まないうように“作られている”ため）分かりづらかったが、時代は今回の“仕事”にとっても積極的だった。

積極的と言うか、執着していた。

その理由はひとえに、標的たる“彼”に会うため。

(……殺気を感じるのは、こっちだ……！)

標的たる“彼”を、確実に殺すため。

しかしそれは、『殺し屋』としてでは、“ない”。

まず正確に言うなら、これは仕事ですらない。

依頼人は、いない。

報酬は、ない。

「勾宮」本家からの命令も、ない。

むしろ本家からは、この件に関わるなどまで言われている。

それでも時代は、動いたのだ。

最悪の相手である時宮と組み、忌避される【呪い名】の奇野と組み、零崎一賊の長兄である『自殺志願』とも接触した。

《暴力の世界》でも異例の、そして異端な行為だろう。

(下手をすれば、いや上手くいっても、確実に本家から追っ手が差し向けられる。『早蕨』か、『総巻』か。時報や翔知を警戒されたなら、最悪『断片集』かあの『人喰い』が出てきても可笑しくないか。)

自身の立場を、そして現状の危うさを再確認しながらも、時代は走る。

殺気は、小汚い小さなビルとビルの隙間から漂ってきていた。
時代は迷わず、狭い路地裏に駆け込んだ。
そこには、

「……………誰も、いない…?」

ただ無人の空間が、広がっているだけだった。

「……………勘違い? いや、そんなはずはない…。」

しかし実際、人っ子一人どころか野良猫や野良犬もない。
灰色の無機質なアスファルトの上には、虫の一匹もいなければゴミ
の一つも落ちていない。

まるで、生命を感じない。

“ついさっきまで、全ての生命を否定する存在がいたかのように。”

「……………逃げられたか……………」

時代が路地裏に駆け込んだ瞬間、タタタツという何かの足音が聞こえた。

恐らくは三角跳びの要領で、ビルの壁を駆け上がっていったのだろう。

ビルは低いと言っても3階建てで、高さは6 mを越えているが、“あいつ”なら可能だ。

そう、時代は判断した。

それぐらひは余裕で出来なければ、彼が“作られた”意味がない。時代は舌打ちをすると、路地裏に背を向けて道に戻ろうとした。しかし、

「おおーっと、ここから先は通行止めさ。悪いけど、地獄に向かつてさっさと歩き出してくんない？」

狭い路地の入り口を塞ぐように、少年が立っていた。

夜の闇をイメージさせる、深い黒髪。

眼の色は金色で、薄暗い路地の中で怪しげに光って見える。

年齢はおそらく吹風と同じくらいで、まだ少年と呼べるくらいの容姿だった。

着ているTシャツからジーンズ、靴下や手袋、はてはベルトのように腰に巻かれているいくつかのホルスターまでが完全に黒づくめである。

もし闇に紛れれば、見えるのは金色の眼だけだろう。

その少年はニヤニヤと軽薄な笑みを浮かべながら、ホルスターから取り出したナイフをお手玉のように弄んでいる。

時代が無言のまま睨みつけいることに気づいた少年は、

「まあ、俺はわざわざこれから死んでく奴にご丁寧に名乗る人間じゃないんだ。だから自己紹介は省略して、パパッと殺させてもらうぜ。」

それだけ言うと、腰に巻かれたホルスターから更にいくつかのナイフを取り出し、空中に無造作に放り投げた。

（このタイミングで、おそらくは「六枚羽」の奴が登場……………嵌

められた。」

自分の迂闊さを呪いながらも冷静に状況を分析していた時代だったが、何か不自然さを感じ視線を上に向けると―――僅かに、しかし確かにその表情が凍りついた。

宙に浮かんだナイフがそのまま、“落ちてこない”。まるで念力で固定されたかのように、刃を下に向けたまま微動だにしないのだ。

「キャハハ！驚いた？実は俺って、超能力者なんだよね、なんつって！」

そう、神経を逆なでする声で言うと、少年は勢いよく両腕を交差させる。

その動きと連動するように、空中に浮かんだ大量のナイフが時代に向かって一斉に飛ぶ。

「……………だけど、遅い……………！」

裏の世界の住人がかわせないスピードではない。

ナイフが宙に浮いているという非現実的な状況の衝撃から抜け出せたのなら、尚更。

時代は後ろに跳んで、距離を取ろうとする。

その先は行き止まりなのでむしろ追い込まれた形になるのだが、一旦は退いた方がいいだろうと判断したのだ。

だが、

「バーカ。逃げられねーよ。」

ニヤニヤと人を小馬鹿にした笑みと共に放たれた言葉通り、時代は

“逃げなかった。”

別に、よければ周りにいる人々が犠牲になる、といったヒーローが時折追いつまれる究極の二者択一みたいな状態に陥ってはいない。そもそも舞台は人気のない路地裏だし、仮に人がいて人質にとられていたとしても、その程度で時代は響かない。

揺るがない。

殺すべき対象が死ねば、何でもいいわけではないが。

殺すべき対象が“殺せれば”、“何でもいい。”

そんな時代が、“逃げられなかった。”

その理由は、“動けなかったから”と言う他ない。

物理的に。

絶対的に。

1mmも、動けなかった。

為すすべもなく“的”と化した時代に、容赦なくナイフの群れが襲いかかる。

腕に。足に。胸に。腹に。脚に。首に。背中に。手に。肩に。頬に。

ナイフが刺さり、ナイフが切り裂く。

さながら悪趣味なオブジェの様な姿になっても、時代は倒れない。

倒れ“られない”。

「キャハハ！キャハハ！俺の『曲絃糸』にかかれば、殺し屋だって殺されるのみってな！」

愉快そうに嗤いながら、少年は両手を鞭のように振るう。

ヒュンヒュンという音が響き、何もない空間で光がキラキラと反射する。

「曲絃糸」

糸使いの最高レベル（ハイエンド）、「曲絃師」と呼ばれるプレイヤー達が使う、室内戦では最強とまで言われる戦闘術。

視認が出来ない極細の糸を使い、敵を絡め捕り、封じ込める。

本来はそれだけの、護身術としての、戦闘術でしかない。

しかし糸を熟知する者が使えばそれは、“殺人術”として昇華する。指を数cm動かせば、相手を数cm四方の細切れにできる。

要はナイフを糸に引っかけ、空中に吊しているのが『宙に浮かんでいる』ように見えたわけだ。

「キャハハ」

人を不快にさせる笑いをあげながら、少年は手をクイッと動かす。その動きだけで時代に刺さっていたナイフが（端から見れば）自動的にはずれ、少年の手に戻っていく。

「キャハハ！俺は死んでく奴に名乗りはしないけど、死んだ奴には

「氣前良く名乗る奴だからさ！よく聞いて、その死んじまった脳細胞に刻みつけな！」

再びナイフでお手玉をしながら少年は喋り続けている。

「俺は暗殺専門集団「六枚羽」が一枚、烏丸カラスマカラスミ鴉魅だ！」

そんな叫びが、こだまする。

天を仰ぎながら少年、鴉魅の哄笑が路地裏に響く。

地面に倒れている時代は、ピクリとも動かず、彼女の体から流れた血は小さな赤い水溜まりを作っている。

他に動くものはいない。

漆黒の少年だけが、ひたすらにその喉を動かしているだけの光景。

しかし……

[illegible]

狂ったような笑いの中、不意に混じったその声によつて鴉魅は口を閉じた。

閉じざるを得なかった。

鴉魅はゆつくりと、まるで目の前の光景を認めたくないかのよう
にゆつくりと、視線をコンクリートの地面に向けた。

そこには――

“ ゆらありい ”

表現するならば、そう言えばいいのだろうか？

まるで幽鬼のような表情で……静かに、しかし途方もない殺気を放ちながら、

少女時代は、立っていた

「お、おい、嘘だろ……？ 何であの数のナイフを喰らって、死んでねえんだよ……！？」

戦く（おののく）鴉魅は知らなかっただろう。

先程から全く動かなかった時代の脳内が荒れ狂っていたのを。

[illegible]

もはや自分が何に対して殺意を放とうとしてるのかも分かっていない。

そう、言うなればただの八つ当たり。時宮時報や自分に対するイライラを、ちょうど近くにいた鴉魅^モに当たっているだけ。だからこそ、当たられる側からしたら冗談ではすまない。

「お、おい……！来るなら来いよ！お、俺の『曲絃糸』に勝てるならな！」

しかしこの場合、その対応は間違っていたと言わざるを得ないだろう。

その情けない、とてもあからさまな虚勢は、脳内がグチャグチャになっっている時代に一瞬の“冷静さ”を与えてしまった。

思考が纏まらないまま時代が突っ込んでくれば、今の“ビビっている”鴉魅でも容易に倒せたのだが……。

冷静さを得た時代には、思考する余裕が生まれてしまう。

「…………『曲絃糸』？あれが……？」

『どうすれば、鴉魅を追い詰め、殺しやすくなるか』

それを考える余裕が。

あざ笑いと共に放たれた言葉は、そのとっかかり。

そんな事を言われれば、鴉魅としては不快な気持ちになるのも当然だろう。

“それが時代の策だとしても、それが事実だったならば。”

「ふざけてんのか……。俺の『曲絃糸』喰らって死にかけてたくせによ。」

「……………うるさいな。出来損ないが。」

「なっ……………!?!」

再びの罵倒。

この時点で精神的な優劣は既に逆転している。今、鴉魅は怒りのせいで精神的余裕をなくし、焦燥にかられている。簡単に言えば、心が乱れきった状態。

それは、操想術をかけるにはうってつけの心理状態。

「そこまで言うならもう一度喰らいな!俺の『曲絃糸』を!」

そう叫んで激しく指を振るった鴉魅に、異変が起こった。

「!?!……………動けねえ!?!」

今度は鴉魅が、動けなかった。

物理的に、絶対的に、1mmたりとも。

(何でだ、何で動かねえ!これは曲絃糸による拘束じゃねえ。だつたら一体……………!?!)

「……………お前の“それ”は、曲絃糸じゃない。」

パニックになっている所に追い打ちをかけるように、時代は辛辣に言い放つ。

それを聞いた鴉魅の顔は屈辱に歪み、思い出したくもない思い出がフラッシュバックする。

（「あなたのそれ、『曲絃糸』じゃないわね。もちろん私の『病蜘蛛』とも違う。私は曲絃師の“成り損ない”だけど、あなたはただの“出来損ない”だもの。」）

実際、鴉魅は曲絃糸を極めてはいない。

拘束ならば問題ないのだが、殺人術。すなわち相手を糸でバラバラにすることが出来ないのだ。

自分の曲絃糸では人を殺せない。

それは暗殺者としては致命的だった。

それを補うために、ナイフと曲絃糸を合わせて殺傷能力を上げたのだが……

それを完全に、否定された。

「!?!? ふざけるな……………、ふざけるなふざけるなふざけるな――
――!?!?」

絶叫する鴉魅だが、謎の拘束によって動くことは出来ない。

そんな彼に向かって、時代は一步步近づいていく。

ゆっくりと、

じっくりと、

じらすように、

まるで、少しずつ恐怖を与えるようにゆっくりと。

「やめろ……やめろやめろ――!?!?」

虚しい叫びなど聞こえないかのように、時代は鴉魅を無視して話しかける。

「……………私は今、とても腹が立っている。だから、お前は死になさい。」

無慈悲な、容赦のない言葉。

そのあまりの冷たさに、鴉魅の恐怖は増大する。

そしてその恐怖に比例するように、鴉魅の意志に従う体のパーツが少なくなっていく様に感じられた。

（なんだ……………何なんだこれは……………？怖いと思えば思うほど、体が縛られていくみたい……………待てよ？“恐怖で縛る”？——一まさか!？）

もはや口すらも動かせなくなった鴉魅の前に、一人の少女が立ちはだかる。

逃げることなど、出来るわけがない。

もしここで奇跡的に鴉魅の体が自由になったとしても、鴉魅は動くことが出来ない。

逃げようという気すら、起こせない。

心は完全に、折れていた。

目の前の少年の目から完全に生きる意志が無くなったのを確認すると、時代は自身の得物、二本のダガーナイフを取り出す。そして今一度、呟くのだ。

「……………私は今、とても腹が立っている。だからお前は、私の思

うとおりに殺されろ。」

「……………バラバラに。」

「————！？」

路地裏から出てきた時代を、目眩が襲った。

致命傷ではなかったと言っても、数十本にわたるナイフが突き刺さっていたのだ。

当然、出血もしている。失血死するレベルではないが、重度の貧血といった感じだ。

そのまま倒れかけた時、何者かが時代の体を受け止めた。

「……………誰？」

心なしか、声からもハリが無くなっている。

（力が、入らない……。ちょっとマズいのかも……。）

そのまま意識が落ちそうになるが、

「まったく、あれほど使うのは控えろと言っておいたのに……。 “そうやって作られた” あなたなら確かに使えるでしょうが、“元々の性質”とは違うのですから、体が拒否してしまうのですよ。気を付けないと。」

「……………うる、さい……………」

そんなムカつくセリフを喋る暇があったら自分に操想術をかけてさっさと死ね。

そう言ってやりたかったが、口も満足に動かせなかった。

完全に意識が無くなる直前に時代は見たものは黒縁の眼鏡と嘘臭い笑顔であり、

「兎にも角にも、あなたが生きていてよかった。……………お疲れ様。」

最後に聞いたのは、そんなムカつくくらい優しい言葉だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5255r/>

零崎文織の人間日記

2011年11月13日23時17分発行